

青梅・羽村ピースメッセンジャー2016
中学生広島派遣事業レポート
～ヒロシマを訪問して考えた平和～



平成29年2月
青梅・羽村子ども体験塾

はじめに

平成28年5月27日、オバマ大統領が現職のアメリカ大統領として初めて広島を訪問したことが大きなニュースとなりました。

広島は人類史上初となる原子爆弾が投下された都市として、日本国内のみならず、世界中に知られていますが、その当時を直接体験されている方は非常に少なくなってきました。

戦争体験の風化が懸念される昨今において、71年前の8月6日に広島で起きたことを改めて学ぶことは、現代を生きる私たち、なかでも若い世代にとって、非常に重要な取り組みであると考えます。

青梅市と羽村市では、中学生25人、大学生リーダー5人、中学校教員2人、市職員3人の35人を「青梅・羽村ピースメッセンジャー」として、8月6日の平和記念式典にあわせて広島へ派遣しました。広島には、国内外から多くの人が集まり、平和記念式典が行われる広島平和記念公園は特別な雰囲気にも包まれていました。

派遣中は、広島平和記念資料館などの原爆に関する施設を訪れ、数多くの被爆資料や世界遺産である原爆ドーム、様々な想いが込められた慰霊碑などを見学しました。

また、学徒動員により軍の司令部で勤務している際に被爆した岡ヨシエさん、爆心地近くで建物疎開作業をしていた1年生が全滅となった旧制広島県立第二中学校の23期生（当時の2年生）である浅野温生さん、国重昌弘さん、小畑彰三さん、田淵廣和さん、塚本昭さん、新出稔雄さん、山本定男さんにご協力いただき、原爆投下前後、そして現在に至るまでの貴重なお話を伺いました。

さらに、原爆で約330名の生徒・職員が犠牲となった広島女学院中学校にもご協力いただき、現在3年生の皆さんと一緒に平和について考える機会をいただきました。

このレポートでは、青梅・羽村ピースメッセンジャーの活動と、この体験を通して参加者が考えた新たな決意について報告します。

平成29年2月

青梅・羽村子ども体験塾実行委員会

— 目 次 —

1	青梅・羽村ピースメッセンジャーについて	1
	目的	1
	参加者	2
	中学生名簿	3
	大学生リーダー名簿	4
	中学校教員名簿	4
	市職員名簿	4
	事業概要	5
2	活動内容	6
	ピースツアー	6
	事前研修	8
	1回目	8
	2回目	9
	3回目	10
	出発式	12
	グループ紹介	14
	広島訪問	17
	スケジュール	17
	1日目 平成28年8月4日(木)	18
	被爆体験談 岡ヨシエさん	18
	広島平和記念資料館見学	22
	2日目 平成28年8月5日(金)	25
	慰霊碑等見学	25

広島ワークショップ	29
意見交換会	41
広島県立第二中学校慰霊碑 お参り・献花	44
広島交響楽団2016「平和の夕べ」コンサート	47
3日目 平成28年8月6日(土)	48
平和記念式典参列	48
事後研修	52
報告会	53
中学生による発表	53
ワークショップ	81
3 平和を願う作文	87



1 青梅・羽村ピースメッセンジャーについて

目的

世界平和は人類共通の願いです。戦争体験者が減少していく中、中学生などの若い世代が戦争を体験した人から直接話を聞き、主体的に学ぶ機会が少なくなってきました。

そこで、青梅市と羽村市の中学生を、原爆が投下された広島へ派遣し、被爆資料や慰霊碑等の見学、被爆体験者との対話などを中心とした平和関連事業を体験することで、戦争の悲惨さと平和の大切さについて自ら考え、行動し、発信できる人として成長することを目的に、「青梅・羽村ピースメッセンジャー」事業を実施しました。



参加者



中学生 25人 (青梅市13人、羽村市12人)

大学生リーダー 5人

中学校教員 2人 (青梅市1人、羽村市1人)

市職員 3人 (青梅市2人、羽村市1人)

合 計 35人

中学生名簿

青梅市			羽村市		
氏名	学校名	学年	氏名	学校名	学年
しのぎき 篠崎 あやか 彩花	第一中学校	2	おかだ 岡田 りな 莉奈	羽村第一中学校	2
まつい 松井 ゆきな	第一中学校	2	こまつ 小松 なつみ 夏巳	羽村第一中学校	2
わたなべ 渡部 ひより 日和	第二中学校	2	さわい 澤井 ましろ 真白	羽村第一中学校	2
なかむら 中村 つかさ 元	第三中学校	2	まつしま 松島 はるか 暖華	羽村第一中学校	2
しみず 清水 ちはる 千晴	西中学校	2	こばやし 小林 よしの の	羽村第二中学校	3
いちかわ 市川 ふうま 楓馬	第六中学校	2	ひど 肥土 まゆこ 茉佑子	羽村第二中学校	3
よしの 吉野 みづき 美月	第六中学校	2	ふなやま 船山 みさき 美妃	羽村第二中学校	3
すずき 鈴木 ゆうし 結心	第七中学校	2	やまもと 山本 しゅか 珠花	羽村第二中学校	3
あさひ 旭 りりか	霞台中学校	2	たかしま 高嶋 かんた 貴多	羽村第三中学校	1
こまぎの 駒木野 しょうた 照太	吹上中学校	3	はしもと 橋本 りゅうせい 竜成	羽村第三中学校	2
おおいし 大石 なつき	新町中学校	3	ほんごく 本國 やまと 大和	羽村第三中学校	2
かたの 片野 こうすけ 紘輔	泉中学校	3	まつなが 松永 はるか 悠	羽村第三中学校	2
かとう 加藤 ゆうみ 優実	桜華女学院中学校	1			

大学生リーダー名簿

氏名	所属
しみず たかひろ 清水 貴博	明星大学
すずき けいた 鈴木 啓太	杏林大学
たかはし もなみ 高橋 萌菜実	杏林大学
みねお げんき 峰尾 元貴	駿河台大学
もちつき まい 望月 麻衣	杏林大学

中学校教員名簿

氏名	所属
ふくだ けいいち 福田 恵一	羽村市立羽村第一中学校教員
いわさき ひとり 岩崎 人里	青梅市立第六中学校教員

市職員名簿

氏名	所属
なみき ともみち 並木 友道	青梅市企画部秘書広報課広聴・国際交流担当主査
あさうみ たくや 浅海 拓哉	青梅市企画部秘書広報課広聴・国際交流担当主任
たかはし みわ 高橋 美和	羽村市企画総務部企画政策課企画政策担当主事

事業概要

青梅・羽村ピースメッセンジャー

ピースツアー

事前研修：3回

- ・ヒロシマについての学習
- ・グループワーク
- ・出発式
- ・保護者説明会



広島訪問：3日間

- ・被爆体験者による証言
- ・広島平和記念資料館等見学
- ・広島ワークショップ
- ・平和記念式典参列
- ・振り返り



事後研修：1回

- ・振り返り
- ・報告会準備



報告会

- ・映像資料を使用した発表
- ・一般参加者を交えたワークショップ

作文

- ・平和を願う作文

2 活動内容

ピースツアー



- 事前研修 3回 7月8日(金)・20日(水)・27日(水)
出発式 7月29日(金)
- 広島訪問 3日間 8月4日(木)～6日(土)
- 事後研修 1回 8月11日(木・祝)

ピースツアーは、「事前研修」「広島訪問」「事後研修」で構成しています。

- 事前研修

グループワークを中心に、第二次世界大戦のこと、広島に投下された原爆のことを学んだ上で、被爆体験者への質問事項や広島平和記念公園等でのグループ活動について話し合いました。

- 広島訪問

グループ活動を中心に、平和記念資料館や慰霊碑等を見学するとともに、被爆体験者の証言を聞き対話することで、戦争の悲惨さや平和の大切さを感じとり、広島訪問の最終日には、平和記念式典に参列しました。

- 事後研修

広島訪問での体験や感じたことを振り返り、自分たちの言葉で広く発信するため、報告会での発表の準備に取り組みました。



事前研修

1回目 平成28年7月8日(金) 19:00~21:00

羽村市生涯学習センターゆとろぎ



ピースメッセンジャーとして事業に参加する35人が集まり、顔を合わせました。まず、全体で自己紹介を行い、クラブ活動や趣味などについて話をしました。

広島訪問中はグループ活動が中心となるため、中学生5人と大学生リーダー1人で構成するグループに分かれ、改めて自己紹介し、それぞれのグループ名について相談し、決定しました。

2回目 平成28年7月20日(水) 19:00~21:00

青梅市役所



学習の前に、平和について考えるきっかけとして、「最近、身近で平和だなと感じたこと」について、一人ひとり発表しました。

その後、「帝国主義とアジア世界」をテーマに、岩崎先生によるレクチャーで第二次世界大戦と日本の戦争について学習しました。

3回目 平成28年7月27日(水) 9:00~15:00

羽村市生涯学習センターゆとろぎ



広島平和記念資料館が作成している「学習ハンドブック」を活用し、福田先生によるレクチャーで広島に投下された原爆と、その被害について学習しました。

また、広島平和記念資料館に展示されている「滋くんの弁当」に関する絵本「まっ黒なおべんとう」の朗読を聞きました。

さらに、広島訪問中にグループ活動として取り組む広島平和記念公園内の慰霊碑等の見学ルートと、被爆体験者への質問事項についてグループごとに話し合いました。

研修の最後には、広島訪問に向けて抱負を書いたメッセージボードを作成しました。



出発式 平成28年7月29日（金）18:00～20:00

青梅市役所



青梅市長、羽村市長、校長先生等学校関係者や保護者の皆様に対して、ピースメッセンジャー全員が、広島で学びたいことや期待することなどについて抱負を述べました。

出発式に当たり、両市の市長、副市長、教育長から激励を受けました。

出発式の後のミーティングでは、原爆で亡くなった旧制広島県立第二中学校1年生への鎮魂と、世界平和への祈りが込められた曲である「レクイエム『碑』（いしぶみ）」を聴き、グループごとに出発前の最終確認をしました。



グループ名 : もっちーず



青梅一中 2年
篠崎 彩花

チームの人と協力し真剣に取り組む



青梅西中 2年
清水 千晴

何か一つでも多く学び帰る



青梅六中 2年
市川 楓馬

誠心誠意で取り組む



羽村二中 3年
山本 珠花

この機会を大切にし平和を学ぶ



羽村三中 1年
高嶋 貫多

楽しく元気に学習する



大学生リーダー
望月 麻衣

自分の中の平和を見つける

グループ名 : Peacies



青梅一中 2年
松井 ゆきな

たくさん学ぶ



青梅霞台中 2年
旭 りりか

今ある平和とこれから作る平和について考える



羽村一中 2年
岡田 莉奈

平和の大切さをいっぱい学ぶ



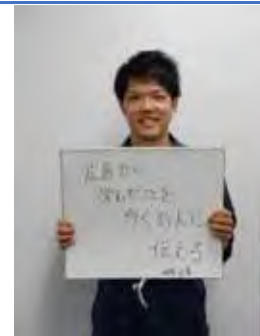
羽村二中 3年
小林 よし乃

今の平和を実感する



羽村三中 2年
橋本 竜成

正しい知識を得る



大学生リーダー
峰尾 元貴

広島から学んだことを多くの人に伝える

グループ名：ピースハンターYMYMHY広島ツアー



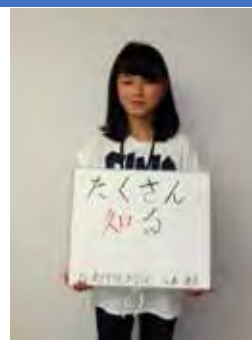
青梅六中 2年
吉野 美月

平和とは何か聞いて学ぶ



青梅七中 2年
鈴木 結心

聞く 話す 知る



桜華女学院中 1年
加藤 優実

たくさん知る



羽村一中 2年
松島 暖華

平和の大切さを知り、考える



羽村三中 2年
本國 大和

毎日学習



大学生リーダー
高橋 萌菜実

多くのことを学びとる

グループ名：HMT♪



青梅二中 2年
渡部 日和

あたり前を大切に



青梅三中 2年
中村 元

平和を学ぶ



羽村一中 2年
澤井 真白

学んで帰ってくる



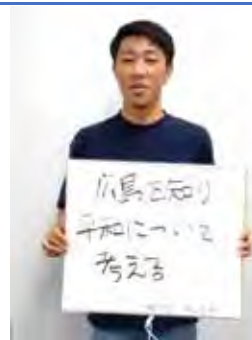
羽村二中 3年
肥土 茉佑子

平和の重みを知る



羽村三中 2年
松永 悠

耳で聞いて頭で考える
感じる



大学生リーダー
清水 貴博

広島を知り平和について考える

グループ名 : Peace of the world



ヒロシマを知って、平和の実現を考える

青梅吹上中 3年
駒木野 照太



戦争、平和について知り、知らない人に伝達できるようにする

青梅新町中 3年
大石 なつき



平和とは何か考える

青梅泉中 3年
片野 紘輔



ヒロシマから未来の平和を考える

羽村一中 2年
小松 夏巳



Feel myself
〜広島的心を心で感じる〜

羽村二中 3年
船山 美妃



中学生と共に平和について学び良い夏の思い出にする

大学生リーダー
鈴木 啓太



広島訪問 8月4日(木)～6日(土)

スケジュール

8月4日(木)		8月5日(金)		8月6日(土)	
5:00	青梅市役所集合 (青梅市中学生)	6:30	起床	5:00	起床
5:10	青梅市役所出発 (バス)	7:00	朝食	5:30	朝食
5:20	羽村市役所集合 (羽村市中学生)	8:00	ホテル出発	6:30	ホテル出発
5:30	羽村市役所出発 (バス)	8:30	慰霊碑等見学 (広島平和記念公園内)	7:00	平和記念式典参列
8:10	東京駅出発 (のぞみ15号) ※車内で昼食	12:00	広島ワークショップ (旧制広島県立第二中 学校23期生・広島女学 院中学校3年生) ※軽食をとりながら	9:00	慰霊碑等見学 (広島平和記念公園内)
12:08	広島駅到着	15:00	意見交換会	11:00	昼食
13:00	被爆体験談(岡さん)	16:00	広島県立第二中学校慰 霊碑お参り・献花	12:00	自由時間 ※おみやげ購入等
15:00	広島平和記念資料館 見学	16:45	夕食・ミーティング	13:52	広島駅出発 (のぞみ132号)
18:00	夕食・ミーティング	18:45	平和のタペコンサート	17:53	東京駅到着
19:30	グループミーティング (振り返り)	22:00	消灯	18:30	東京駅出発 (バス)
22:00	消灯			20:00	羽村市役所到着 (羽村市中学生)
				20:30	青梅市役所到着 (青梅市中学生)

1日目 平成28年8月4日(木)

被爆体験談 岡ヨシエさん(中国軍管区司令部跡)



広島訪問初日、夏の日差しが照りつける広島に到着し、広島市中央公園内にある、中国軍管区司令部跡の旧防空作戦室(半地下)で、動員学徒として14歳の時に被爆した岡ヨシエさんから、原爆が投下された前後の体験談を聞きました。

この場所は爆心地から700メートルの距離にあり、広島の大原爆被災の第一報は岡さんによりここから発信されたと言われています。

岡さんは、当時比治山高等女学校の3年生で、中国地方の軍の司令部で、警戒警報や空襲警報等を交換機で各所へ連絡する仕事をしていました。



8月5日の夜から未明にかけて、B 2 9 が頻繁に飛来し、西宮市や今治市、宇部市など、各地への空襲に関する情報が入り、一晩中眠れぬまま朝を迎えたそうです。

8月6日、朝食のために一度宿舎に帰り、司令部へ戻る際、「あと5～6分で交代だ」と深呼吸をしながら見上げた空は、雲一つない真っ青な空だったそうです。しかし、時間になっても交代が来ないまま8時10分に3機のB 2 9 が広島上空に侵入してきました。8時13分にブザーがなり、交換機で警戒警報を発令すると同時に、開いていた窓から真っ白なものすごい光が入ってきました。岡さんは、事故だと思ったとたんに爆風で飛ばされ、強い衝撃を受けて意識を失ったそうです。



意識が戻り、外へ出て広島市内を見渡すと、全てが瓦礫と化し、普段は建物で見えるはずのない瀬戸内海の似島（にのしま）まで見えたそうです。司令部へ戻る途中に、倒れている兵隊から「新型爆弾にやられた」と聞き、そのことを、かろうじて繋がった福山歩兵連隊への電話で「広島が全滅しています。新型爆弾にやられました。」と伝えたそうです。

その後、大火災となり、友人と避難する途中で火に囲まれ、死を覚悟しましたが、その時大粒の黒い雨が降り出したことで火が消え、助かりました。その時は、たっぷりと放射能を含んだ恐ろしい雨とも知らず、神様に感謝したそうです。

救護所へ手伝いに行くと、体にウジがわく人や全身やけどの子どもなど、多くのけが人がいて、ほとんどの人が10日過ぎまでに亡くなっていったそうです。

お話の最後に、「あれから71年が経ちました。戦争ほどむごくて悲しく、辛いものはありません。今日の話聞いて、僕たち私たちが絶対戦争を起こさない、平和な日本のために頑張っていくという思いを強くして欲しい。」と、メッセージをいただきました。



広島平和記念資料館見学



広島平和記念資料館では、主に原爆被災者の遺品や被爆資料を展示している本館を見学し、原爆による被災の状況や、原爆の特徴でもある熱線、爆風、高熱火災、放射線による人的被害などについて学習しました。

大勢の来館者で混雑する中での見学となりましたが、展示品を写真に撮ったり、メモを取ったりしながら熱心に見学しました。

5月に広島を訪問した、オバマ大統領が寄贈した折り鶴も見学することが出来ました。





2日目 平成28年8月5日(金)

慰霊碑等見学(広島平和記念公園)



広島訪問2日目、事前研修の中で学習し、興味を持った慰霊碑等を実際に見学するため、広島平和記念公園内をグループごとに散策しました。

各グループの主な見学先は、次のとおりです。

- もっちーず

広島市立高女原爆慰霊碑、被爆したアオギリ、峠三吉詩碑、旧天神町北組慰霊碑、原爆死没者慰霊碑、被爆した墓石、原爆の子の像、レストハウス、爆心地

- P e a c i e s

嵐の中の母子像、原爆死没者慰霊碑、被爆したアオギリ、峠三吉詩碑、被爆した墓石、
原爆の子の像、レストハウス

- ピースハンターYMYMHY広島ツアー

原爆死没者慰霊碑、旧天神町北組慰霊碑、レストハウス、相生橋、爆心地

- HMT♪

原爆供養塔、被爆した墓石、レストハウス、被爆したアオギリ、嵐の中の母子像、原爆
犠牲国民学校教師と子どもの碑、原爆犠牲ヒロシマの碑、国立広島原爆死没者追悼平和祈
念館

- P e a c e o f t h e w o r l d

嵐の中の母子像、原爆死没者慰霊碑、旧天神町北組慰霊碑、平和の灯、レストハウス、
原爆の子の像、平和の泉、被爆した墓石、原爆供養塔、相生橋



(原爆の子の像)



(被爆したアオギリ)



(峠三吉詩碑)



(被爆した墓石)



(レストハウスの地下室)



(原爆死没者慰霊碑)

広島ワークショップ（広島市青少年センター）（参加者 55 人）

～旧制広島県立第二中学校 2 3 期生の被爆体験を聴いて考える～



ピースメッセンジャーと被爆体験者、地元広島の中学生とが対話するワークショップを開催しました。

旧制広島県立第二中学校 2 3 期生の浅野温生さん・国重昌弘さん・小畑彰三さん・田淵廣和さん・塚本昭さん・新出稔雄さん・山本定男さんにご協力いただき、広島女学院中学校の 3 年生 10 人と一緒に、被爆体験を聞かせていただきました。

このワークショップでは、ファシリテーターとして浦山絵里さん（ひとづくり工房 e s u c o 代表）に進行いただき、広島二中 2 3 期生の被爆体験やその後の出来事などを知り、自分達の「これから」について考えを深めることを目的として、対話を重ねていきました。



旧制広島二中23期生の7人を囲むようにグループに分かれ、まず、対話の準備として、好きなことや将来の夢、今日期待していることなどを参加者がそれぞれ話しました。

リラックスしたところで、広島二中23期生から被爆体験を伺いました。「原爆投下前の暮らし」、「被爆の瞬間」、「原爆投下後の行動や街の状況」などについて、中学生だった当時の体験や気持ちなどを振り返り、お話いただきました。

参加者は熱心に聞き入り、ポイントや気になる点などを、テーブルに敷いたクラフトペーパーに書き込んでいきました。

さらに、体験談を聞いて疑問に思ったこと、詳しく教えて欲しいことなどについて、広島二中23期生の皆さんに質問し、それに答えていただく形でお話いただきました。





広島二中23期生の皆さんからは次のようなお話がありました。

- 作業場所だった東練兵場から、B29が飛んでくるのが見えたが、いつものように偵察機だろうと思っていた。するとB29が突然方向を変え、その瞬間原爆が投下され、意識を失った。
- 原爆が落ちた後なんとなく左を見たら、たくさんの火の玉が落ちてくるのを見た。これは何人もの人が目撃している。
- 8月6日、2年生は元々建物疎開に行く予定だったが、急きょ東練兵場のさつまいも畑の草取りに行くことに変更となった。代わりに建物疎開に行った1年生は全員亡くなり、2年生は生き残った。
- 8月6日は家の手伝いのため学校に行かず、宇品港から船で南下していたときに原爆が投下された。その日のうちに実家がある広島中心部に向かい、翌日、爆心地付近を見たところ、多くの死体や、呆然と立ち尽くす老婆が背中に死んだ赤ちゃんを背負っている姿などを目撃した。
- 原爆投下翌日に、友人の家から西広島にある自宅に歩いて向かった。途中、道に黒こげになった女性と赤ん坊が横たわっていた。相生橋付近で空襲警報が鳴ったが、「もう広島に爆弾が落とされることはないだろう。」と思っていたため怖くはなかった。
- 原爆投下後も2ヶ月間ほど原爆症に苦しんでいた。当時、「放射能に日本酒が効く」と言われており、おじいさんが日本酒を飲ませてくれた。

- 1年生がどのようにして亡くなったのかについて知らなかったが、広島テレビが制作・放映したドキュメンタリー番組「碑」（いしぶみ）を見て、初めて1年生のことについて知った。ドキュメンタリー番組「碑」は、広島二中の卒業生（20期生）だった薄田さんが、1年生のことを後世に残すべく企画したものである。制作にあたり、遺族の方などから手紙の形で証言を得た。薄田さんがいなければ、1年生についてわからないままだったと思う。
- 今の若者には一生懸命できること（勉強など）を頑張ってもらいたい。



（左から、山本定男さん・浅野温生さん・国重昌弘さん・塚本昭さん・田淵廣和さん・小畑彰三さん・新出稔雄さん）

違うグループの参加者同士で集まり、自分たちが聞いたり話したりした内容を伝えあい、共有しました。





広島二中 2 3 期生の皆さんにお礼の気持ちをお伝えし、ワークショップを閉会しました。









意見交換会（広島市青少年センター）



ワークショップに引き続き、広島二中23期生の小畑さん・田淵さん・塚本さん・新出さん・山本さんにお時間をいただき、ワークショップでのお話の補足や質疑応答による意見交換をさせていただきました。

資料などを使いながら丁寧にお話しいただき、参加者は、原爆の恐ろしさや今ある平和についての考えを深めました。



ワークショップ・意見交換会を通して、参加者からは次のような感想がありました。

- 質問にしっかり答えてくださったり、資料を間近で見ることができたり、今までの戦争体験を聞く機会とは少し違った経験ができたのでとても勉強になりました。本当にありがとうございました。
- 今回のお話を多くの方に伝え、これからの平和を守っていきたいと思います。ありがとうございました。
- お話を聞かせていただき、ありがとうございました。自分は戦争の話を聞いたことが無く、とても衝撃を受けました。このことを多くの人に伝えていきたいです。

- 爆心地に近づいて、その様子を実際に目にしたという貴重なお話を聞くことができよかったです。
- 平和の反対語は戦争だと思っていたけれど、お話を聞いて、戦争がなくても、それだけで平和になるということではないのだと思いました。
- 今まで試験勉強が面倒くさいなどと言ってきましたが、お話を聞いて自分たちが今勉強できることは感謝すべきことだし、一生懸命勉強していきたいと思いました。
- 二年生が急に東練兵場に行くことになって命が助かったように、人生はいつどうなるかわからない。今の日常を当たり前だと思わず感謝することが大切だと感じました。



広島県立第二中学校慰霊碑 お参り・献花



ワークショップ・意見交換会では、広島二中23期生の皆さんから貴重なお話を聞かせていただきました。原爆が投下された日、一学年下の1年生は、建物疎開作業で爆心地に近い本川の土手に集合していたため、ほとんどの方が原爆で即死し、最終的に全員が亡くなっています。

本川の土手にある、戦災と原爆で亡くなった広島二中の職員・生徒を慰霊するために建てられた「広島県立第二中学校慰霊碑」に、広島女学院中学校の皆さんと一緒に参りと献花をさせていただきました。

慰霊碑の裏には、亡くなられた352人のお名前が刻まれています。





広島交響楽団 2016「平和の夕べ」コンサート（広島国際会議場）



広島国際会議場フェニックスホールで開催された、「広島交響楽団2016『平和の夕べ』コンサート」を鑑賞しました。

このコンサートは、被爆の実相を風化させず、「ヒロシマの心」を伝え、平和への思いを共有するための催しとして毎年開催されています。

広島出身で世界を舞台に活躍されているピアニスト、萩原麻未さんによるシューマンのピアノ協奏曲イ短調の演奏などに聴き入り、音楽を通じた世界平和へのメッセージを感じる機会となりました。

3日目 平成28年8月6日（土）

平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）参列



広島訪問の最終日には、平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）に参列しました。

原爆の投下時刻である8時15分に、原爆や戦争で亡くなられた全ての方へ黙とうを捧げました。

黙とう後、広島市長による平和宣言、子ども代表による平和への誓い、内閣総理大臣からのあいさつなどがありました。



式典終了後、広島での最後のグループ活動として広島平和記念公園周辺を見学しました



(原爆死没者慰霊碑への献花)



(元安橋)



(平和記念資料館のピース・ポスト)



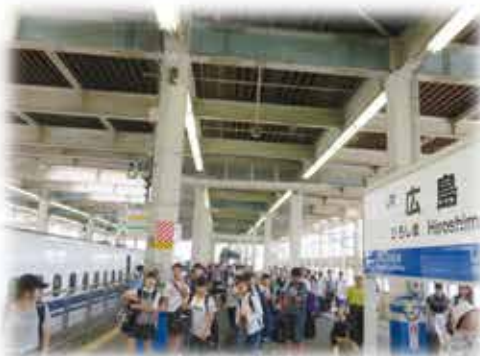
(爆心地)

広島平和記念公園からバスで広島駅へ向かう途中、「被爆電車」を見ることが出来ました。

71年前に被爆し、現在も運行している貴重な車両で、地元広島の人でもほとんど見るチャンスがないそうです。たくさんの思い出を胸に刻み、広島を離れました。



～広島訪問の様子～



事後研修

平成28年8月11日（木・祝）9：00～17：00

青梅市役所



広島訪問での体験をそれぞれが振り返り、報告会でどのように発表するか、大学生リーダーを中心にグループごとにまとめ、原稿の作成や写真の選定などの準備に取り組みました。

発表の準備が整ったグループから、福田先生、岩崎先生の助言を受けながら、リハーサルを行いました。

報告会

～中学生による発表～

平成28年8月14日（日）13：00～14：00

羽村市生涯学習センターゆとろぎ （参加者121人）



ピースメッセンジャーたちがピースツアーを通じて体験したことや感じたことを発表する報告会を開催しました。

会場には、青梅市長、羽村市長、校長先生等学校関係者や青梅市・羽村市の市民など多くの方々にお集まりいただきました。



司会：片野 紘輔（青梅泉中3年）、船山 美妃（羽村二中3年）

グループ「もっちーず」の発表

～原爆投下前～

篠崎 彩花（青梅一中2年）、清水 千晴（青梅西中2年）、市川 楓馬（青梅六中2年）、
山本 珠花（羽村二中3年）、高嶋 貫多（羽村三中1年）



広島は、当時、長崎、小倉、新潟とともに軍に関する重要な施設が多く、栄えた都市でした。軍事施設の一つの広島城は、中国軍管区司令部として、中国地方の軍の指揮をとる重要な役割がありました。宇品港は、大陸への軍用輸送基地と呼ばれていて、陸軍輸送部という兵器や衣服を送る軍事施設が設置してありました。



（広島城 ごもんばし御門橋）



(平和記念公園内の「消えた町」
旧天神町北組慰霊碑)

また、広島は、商業都市としても栄えて
いました。現在の平和記念公園となってい
る場所は、もともと、大きな繁華街でした。

その中にあった広島県産業奨励館では、
広島県の物産の展示や商工業に関する調
査や相談を行う場所となっていました。

ここで日本で初めて、バウムクーヘンがつくられたとバスガイドさんが教えてくれました。



(旧広島県産業奨励館 現在の原爆ドーム)

当時の食事は、食料が不足していたため、いも類や豆類、おもゆなどを日常的に食べていました。

当時14歳、県立広島二中の2年生だった田淵廣和さんのお話によると、その中でもごちそうだったのは、じゃがいもを蒸かしたものでしたそうです。



(当時の人々の食事 画：清水千晴)

女性はもんぺを着て、男性は国民服令により交付された国民服を着て生活をしていました。

一般の家や商店街は、木造建築が多く、国の施設や銀行、広島県産業奨励館などは、鉄筋コンクリートで建てられました。

男性は、ほとんどの人が徴兵され、男の人手が足りなくなったので、女性や中学生が農家や工場での作業をするようになりました。



(鉄筋コンクリートで建てられた元大正屋呉服店(現在のレストハウス)の地下室)

当時の中学生の学校は、男女で分かれていて、男性は中学校へ、女性は女学校に通っていました。

学校では、勉強ができずに学徒動員にかりだされてきました。学徒動員とは、大人の男性が戦争に行ってしまう、人手が足りなくなったため、代わりに中学生以上の子ども達が仕事を手伝う制度です。学徒動員では、火災が広がらないようにするために、建物を壊す建物疎開をしたり食料や衣服などを作ったりする仕事などをしていました。

中学生はみんな、国民服やもんぺなどを着て学徒動員に行っていました。当時の中学生は、軍国少年、軍国少女だったので、小さいころからお国のためと教えられていました。なので、男性は将来、軍に入りたがっていて、特に海軍が人気



(被爆した中学生の服
上田キヨ氏寄贈)

(女学生のもんぺ
宮本シズヨ氏寄贈)

でした。でも、戦争のことを怖いという人もいました。

女学校3年生だった岡さんは、広島城の半地下にあった「中国軍管区司令部」で働いていました。そこで、発令された「警戒警報」・「空襲警報」等の交換機による各所への連絡や、敵機がどこにいて、どんな武器を持っているか等の情報を連絡する業務を担当していました。岡さんは、軍事施設で働いていたため、食べ物は他の人よりも恵まれており、当時貴重だったお米を使った料理を食べていたそうです。



(中国軍管区司令部入口階段)



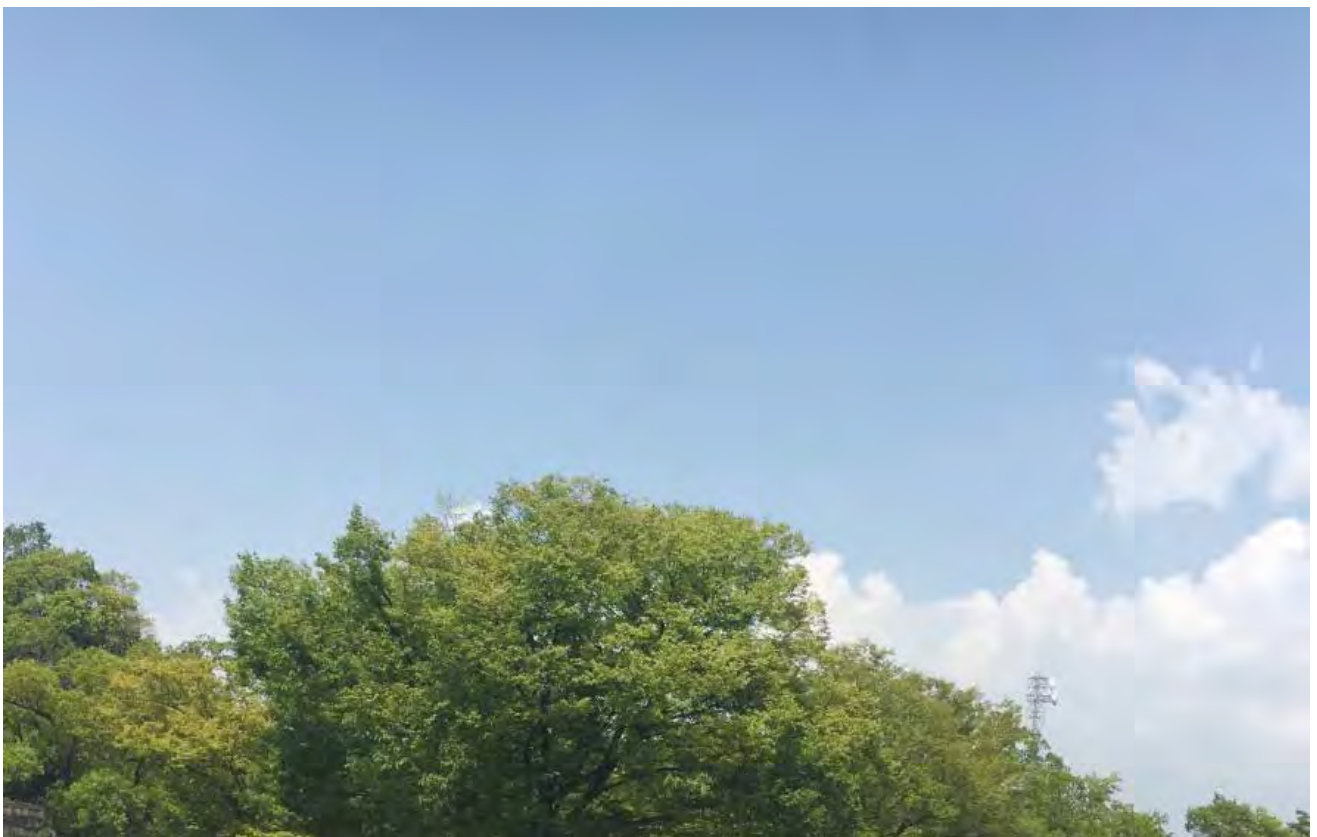
(岡さんがいた部屋)

広島二中の2年生だった田渕さんは、原爆投下前日までは建物疎開をしていましたが、8月6日は急に東練兵場のさつまいも畑の草取りに行くことになりました。その日の朝、田渕さんが空を見上げると、雲一つ無い青空が広がっていました。



(本川橋から見た広島二中生の建物疎開作業場所)

その空から、キラキラと光るものが落ちてきました。



グループ「Peacies」の発表

～8月6日 8時15分～

松井 ゆきな（青梅一中2年）、旭 りりか（青梅霞台中2年）、岡田 莉奈（羽村一中2年）、
小林 よし乃（羽村二中3年）、橋本 竜成（羽村三中2年）



1945年8月6日8時15分、広島市上空600メートルで、世界で初めての原子爆弾が炸裂しました。

「安らかに眠って下さい 過ちは 繰返ませぬから」

原爆死没者慰霊碑に刻まれている言葉です。今から71年



（原爆死没者慰霊碑）

前、広島に放たれた、たった一発の原子爆弾によってたくさんの尊い命が失われました。一命を取り留めた人も、差別を受けたり、後障害に悩まされたりしました。それでも生き残った人の中には、自分の体験を後世に伝えていくべく、語り部として活躍している人もいます。水を求めてさまよう人々、響き渡る悲鳴、男か女かも分からないほどにボロボロになった死体。語り部の方々は、全員生きながらにして地獄を見ていたのです。そのメッセージの一つ一つに「核兵器や戦争は全体にあってはならない」という強い意志を感じました。

今からお話しすることは、全て真実です。しっかりと聞いてください。過ちを繰り返さないためにも。

これから、3人の被爆体験者の方の8時15分についてお話します。

まず最初は、岡ヨシエさんのお話です。

岡さんは、女学校の生徒で、兵隊の人と一緒に働いていました。初めは50人ほどしか女学校の生徒はいませんでした。みんな仕事がきっちりと出来たため、さらに40人追加されたようです。



(岡ヨシエさん)

8時15分のほんの数分前。岡さんは、その時B29が広島を横切ったことを知り、警戒警報を出さなくてはと思いました。あまりにも急いでいたため、司令室の窓を閉めることを忘れてしまいました。急いで警戒警報を出そうとしたとき、原爆は落とされました。

8時15分。ものすごい光が窓から入ってきました。真っ白い光です。その光とともに爆風が入ってきました。岡さんは飛ばされ、脳震とうを起こして気絶してしまいました。

その後、岡さんは気が付きましたが、広島の変わりようには言葉を失ったようです。これが岡さんの8時15分です。

次に、山本定男さんのお話です。

8時15分頃、B29が飛んできたとき、「いつもみたいに偵察だろう」と思って友人たちと東練兵場から眺めていた当時中学2年生だった山本さん。



(山本定男さんの8時15分)

すると、B29が突然反転し、その瞬間、原爆が投下されました。

ピカっという光と、ドンっという音が同時に聞こえ、今の広島駅あたりに巨大な赤ではなくピンクみたいな色をした火の玉がモワァーと出てきました。爆風によって、山本さんは顔の左側に大きなやけどを負い、何が起きたのかわからずただ眺めていました。4～5秒くらいして、火の玉は山本さんたちの方へ。それから山本さんは、尾長天満宮の山の方に避難して助かりました。そこからの景色は何もかも焼かれ、あたり一面見渡せたそうです。

最後に、国重昌弘さんのお話です。

国重さんは当時の広島二中2年生でした。8月6日、1年生は建物疎開へ、2年生は広島駅近くの東練兵場へさつまいも畑の草取りに行っていました。



(国重昌弘さん)

友達に、「おい、国重。アメリカの飛行機が飛んぞ。」と言われ、空を見てもみると、B29が飛んでいました。そして北から東に向きを変えたのが見え、その後2、3個光るキラキラが見えました。その直後、国重さんは気を失いました。

爆風で一度は目を覚ましたものの、二度目の吹き戻しの風によって、もう一度気を失ってしまいました。

目を覚ました時には、友達の顔がねずみ色になっていて、取ろうと思ったら、ほっぺの皮ごととれました。空を見れば赤い入道雲があり、そこら中が火の海です。先生に「解散」と言われ、300人のうち200人以上は家に帰りましたが、国重さんはそんな気力もなく、その場にしゃがみ込みました。



(原爆が投下された時の上空 米軍撮影)

日光が傷にしみて痛いので、倒れ掛かった家の中に入ると、向こうから顔が真っ黒に焦げた1年生が歩いて来ました。爆心地に近かった1年生は黒色、少し離れていた2年生はねずみ色の顔になりました。そして歩いてきた1年生を家に入れてやると、「すずしい…」と言いき、息を引き取りました。このことを国重さんは今でも忘れられないそうです。

このように、8月6日8時15分に起こったことは、約14万人を犠牲にしました。

広島二中の2年生は全員助かり、1年生は全滅。もし、その日、2年生が建物疎開の作業をしていたら…運命は変わっていたかもしれません。また、原爆が落とされてすぐ亡くなった人以外にも、後から放射能の影響で亡くなった人もいます。

原爆の悲劇は、71年経った今でも続いているのです。こうした事実を私たちは決して忘れてはいけません。



(広島県立第二中学校慰霊碑)

グループ「ピースハンターYMYMHY広島ツアー」の発表

～被害～

吉野 美月（青梅六中2年）、鈴木 結心（青梅七中2年）、加藤 優実（桜華女学院中1年）、
松島 暖華（羽村一中2年）、本國 大和（羽村三中2年）



昨日までは豊かだった街並みが、元気だった人々が、今から71年前の8月6日、一瞬にして壊されました。広島に落とされた原子爆弾は、たくさんの被害をもたらしました。

その中でも私たちは「熱線」、「爆風」、「高熱火災」、「放射線」、「後障害」の5つに分け、その詳細について説明します。



(現在の広島の街並み)

まず、熱線についてです。熱線とは、ものすごく強い光と太陽の温度に近い3,000～4,000℃の熱のことです。やけどは、熱線に直接面していた部分に多くなっており、爆心地から遠く離れたところでも、素肌の部分はやけどを負いました。ワークショップで私のグループに話をしてくれた塚本さんは、左腕にやけどを負い、他のグループの国重さんは腕のやけどの跡を見せながら話をしてくれました。



(塚本昭さん)



(銀行入口の石段に残った人影
住友銀行広島支店寄贈)

平和記念資料館では、実際に石段に座っていた人が熱線により一瞬で消えて、その人が座っていた格好の黒い影が残っているのを見ました。人々を苦しめた戦争は二度としてはいけないことだと思いました。

次に爆風についてです。爆風とは、原爆が落とされた時に吹いた、秒速440メートル、圧力35トンにもなる風のことです。爆風によって木造の建物は壊れ、ガラスも飛ばされてしまったそうです。また、原爆ドームや、被爆した墓石、アオギリの木など、たくさんのものが被害をうけました。



(爆風で切断された広島富国館天井の鉄骨
富国生命保険相互会社寄贈)



(被爆電車)



特に印象に残っているのは、被爆電車です。原爆が投下された日、路面電車は全焼全壊し、真っ黒になってしまいました。現在でも、当時の車両がきれいに色を塗り直して広島のみちを走っていました。

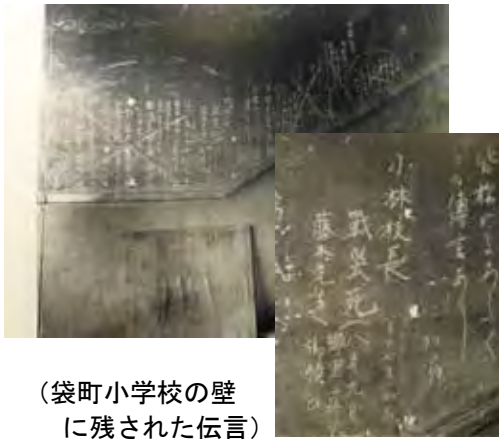
岡さんの話を聞いて、原爆の被害は物だけではなく人までもが爆風で飛ばされ、傷を負った人や即死した人、建物の下敷きになって潰れてしまった人もいたそうです。

次に、この写真を見てください。これは、高熱火災の被害によるものです。原子爆弾の爆発と同時に放射された熱線によって、家が自然発火したり、台所から火が出て火災となり焼け野原となりました。



(炎上する市街の様子と溶けた瓦のかたまり)

話を聞かせてくださった岡さんは、建物が燃えて無くなってしまったため、広島市内が一面見渡せたと言っていました。また、色々な方向から火が追ってきて、火に囲まれてしまったそうです。



(袋町小学校の壁
に残された伝言)

次に、この写真を見てください。これは爆心地から約460メートルの位置にある袋町小学校です。校舎とともにたくさんの児童が亡くなりました。唯一、鉄筋コンクリート造りだった建物の一部が残り、すすにより黒板のようになりました。その壁に、家族などにあてた伝言が多く記されました。

原爆の脅威で、もっとも危険であると言えるものこそ放射線です。爆発時にとてつもない量の放射線が放出され、その異常な量の放射線により、熱線や爆風とともに人々の命を奪い、その後もその地に留まり続けました。

放射線の被害でもっとも有名なのは、ガンです。ガンは、ガン細胞の塊によって引き起こされるので、被爆直後は発症しません。しかし、多量に放射線を浴びることで、吐き気や食欲不振、下痢、吐血、血便など様々な症状をもたらします。

その一例に、髪の毛が抜けるというものがあります。これは、放射線にあるDNA破壊能力によるものです。このような症状をまとめて「原爆症」といい、これらの症状が出た後、最悪の場合は数日で死に至ります。



(原爆症で抜けた髪の毛 山下博子氏寄贈)

被爆者の塚本さんは、こう語ってくれました。「本当の原爆の恐ろしさは放射線だ。」爆風や熱線は、一瞬にして14万人の尊い命を奪いました。放射線は、生き残った人々を今もなお苦しめています。

最後に、後障害についてです。被爆してすぐに起こる症状として、吐き気、発熱などがありますが、それだけではなく、その後もたくさんの障害を引き起こします。これが後障害です。



(ケロイド)

この写真を見てください。これは、後障害の一つのケロイドです。これは、国重さんに見せていただいたものです。これはやけどが治った後、盛り上がってしまう症状です。また、被爆は子どもにもたくさんの影響を及ぼしました。死者が出ることもあり

りましたし、生き延びた子どもも死亡率が高くなってしまいました。1950年頃から、白血病や、その他様々な病気を発症する人が増加しました。

この写真は、小畑さんに見せていただいた被爆者健康手帳です。これがあることによって、被爆者であるという証明になります。



(被爆者健康手帳)

しかし、長い年月を経て引き起こす病気については、未だ十分に解明されていません。現在も、後障害について調査や研究が続けられています。



(平和の灯)

今もなお、被害は続いています。私たちは、次の世代に原子爆弾がいかに残酷で哀しいものであるかを被爆者から直接聞くことのできる最後の世代です。

平和記念公園には、世界から核兵器がなくなる日まで燃やし続けられるという「平

和の灯」があります。この灯が一日でも早く消えることを願い、より多くの人に私たちが広島で学んだことを伝えていきます。



グループ「HMT♪」の発表

～その後～

渡部 日和（青梅二中2年）、中村 元（青梅三中2年）、澤井 真白（羽村一中2年）、
肥土 茉佑子（羽村二中3年）、松永 悠（羽村三中2年）



私たちは、平和記念公園内にある「原爆の子の像」とアオギリを見ました。原爆の子の像は、佐々木禎子さんのクラスメイトが全国の生徒会に呼びかけ、原爆で亡くなった子供たちの霊を慰め、平和を築くための像を造ろうという運動が始まり、全国からの募金により完成しました。



(佐々木禎子さんが残した折り鶴
佐々木繁夫氏・雅弘氏寄贈)

佐々木禎子さんは、2歳の時に被爆しましたが、傷もなく、元気に成長していました。しかし、10年後の小学校6年生の秋に突然白血病が発症し、次の年の2月に入院しました。1000羽鶴を折ると病気が治ると信じ、回復を願い、薬の包み紙などで鶴を折り続けましたが、8ヶ月の闘病生活の後、亡くなりました。それから60年以上経った今でも多くの方が千羽鶴をお供えしています。

このアオギリは、2011年に亡くなった沼田鈴子さんがいつも戦争の話をしてきていたところでは、原爆の爆風により片足を切断しました。そして結婚をすることも諦め、精神的にも追い込まれ、自殺をしようと考えました。そんな時、芽が出るはずがないと言われていたアオギリが、原爆投下の翌年、芽を出しました。一生懸命育つアオギリを見て、私も生き残った者として命を無駄にしてはいけないと、生きる希望をもらい勇気づけられたそうです。それから沼田さんは亡くなるまで、たくさんの人々に伝える活動を行ってきました。



(被爆したアオギリ)

このように、被爆した人の中には、病気やケガで働けなくなる人もいました。被爆しても感染しないのに、まわりの人たちからは、被爆者に近づくと感染すると言われ、差別されたりもしました。



(浅野温生さん)

当時、広島二中の2年生だった浅野さんは、作業当番日の一日の違いで、自分たちの身代わりのように亡くなってしまった1年生のことを思い、語ってくださいました。「大勢の人が悲惨な状態で亡

くなってしまったのに、自分が生きていてよいのだろうか。生きることが申し訳なく思えてしまう。」とおっしゃっていました。その言葉が、今の私たちにはとても信じられませんでした。なぜなら「生きられたのなら良かった。」と思ってしまうからです。しかし、このようにお話される語り部さんがほとんどだと知りました。

浅野さんは、生き残った者の使命とし、彼らの生きた証として本を残しています。この日の出来事を伝えたいのです。もう同じ過ちを繰り返したくないのです。あの日から大きな戦争がないのは、広島や長崎があるからだとも語ってくださいました。

原爆ドームの周りは、人が多いのにもかかわらず、蝉の声だけが響いていました。私は、原爆ドームを見た瞬間、回りの景色が見えなくなり、原爆の恐ろしさを感じました。

私は、今も原爆ドームや慰霊碑があるのは、原爆を無かったことにしないため、後世に伝えていくためだと感じました。そして、被爆者の方は、私たち中学生に一番伝えたいこととして、「一人ひとりの頭の中に、1/10でも1/100でもいいから、原爆があったことを忘れないでほしい。」とおっしゃってくれました。

これからの私たちは、原爆を無かったことにしないため、後世に伝えるために、原爆のことを次の世代へ伝え、広めていきます。



グループ「Peace of the world」の発表

～メッセージ～

駒木野 照太 (青梅吹上中3年)、大石 なつき (青梅新町中3年)、片野 紘輔 (青梅泉中3年)、
小松 夏巳 (羽村一中2年)、船山 美妃 (羽村二中3年)



当時は子どもから大人まで、家族のためでもなく、自分のためでもなく、国のために働いていました。動員学徒として召集された多くの学生は、体調が悪くても、まじめに一生懸命に作業をしていたと言っていました。僕は、なぜそこまで、軍の戦力として一生懸命に国のために働く事ができたのか知りたくなりました。

岡さんや新出さんは、生まれた時から生活の中心は「戦争」であったため、すべては「お国のため」と教えられていたそうです。

新出さんは海軍に志願したかったと言いつつ、あの頃は自分で人生を選べなかったとも言っていました。私たちが学校へ行くのが当たり前のように、軍事施設や軍のために行動することが当たり前だったのです。戦争の善悪の



(新出稔雄さん)

判断をするのはとても難しい環境だったことが感じられました。

岡さんは、戦争が間違っていることに、なぜ気がついたのでしょうか。

8時13分に出た「警戒警報」を伝えるために、「警戒警報ハ(ツレイ)…」と言った時に真っ白な光と爆風によって気を失った岡さんは、目を覚まして外に出ると辺りは焼け野原になっていたそうです。

その時の話をしていた岡さんの「思い」が伝わり、私たちは感情移入してしまいました。周りには皮膚がドロドロになった人、顔が膨れあがって誰か分からない人、お母さんに会いたくても会えない子どもたち、とても悲惨な状況を見て衝撃を受けたそうです。そんな悲惨な状況、それこそが戦争の実態であることを知り、戦争はやってはいけないことと気づくことが出来たのではないかと思います。

お母さんの腕の中で「私、お国のために死ぬの。だから泣かないで。」と言って命を落とした少女の話が心に残りました。国民一人ひとりが、自分の信念を持って国のために戦争に参加するのが当たり前で、岡さんが「戦争が終わってよかったね。」という「バカ！」という岡さんの太ももを叩いた同級生。みんな国のために一生懸命まじめに頑張ってきました。そのような中、国の考えに逆らって「非国民」と言われた人たちもいます。そのように呼ばれた人たちの中には「命の大切さ」を考えていた人もいたはずです。



(岡ヨシエさん 中国軍管区司令部跡)

この戦争では、国の教育により自分の考えを持てなかったために、戦争に協力して命を失った人が多くいたのではないのでしょうか。だからこそ、私たちは自分の意思をしっかりと持って、人に流されない事が大切だと考えました。

これらを踏まえて、将来に向けてどうしていきべきかを考えました。

戦争が起こったのは、当時の人たちが周りに流されてしまったことも原因の一つではないのでしょうか。数の論理などによって流されてしまわないように、自分の意見・意志を強く持つことが大切だと思います。

もう一つ原因と考えたことは、知識・情報を多く持っていなかったことです。今の私たちには、原爆は危険なもの、戦争は怖いものなど知識と情報がたくさんあります。知識があると少しは過ちに気づけたり、防ぐことができると思うのです。ニュースや新聞などから得た情報を鵜呑みにするのではなく、立ち止まって考えることも大切だと思いました。

私たちは、多くの方々の無念の想いの上に今、生きています。

今回、広島で多くのことを学びました。最も印象に残っていることは、平和記念資料館で見た原爆によって被爆した街並みや、岡さんや新出さんなど被爆者の方々のお話です。



(広島平和記念資料館)

今まで私たちは、オブラートに包まれたものを学んでいましたが、原爆の恐ろしさを実際に目の当たりにしました。

戦後71年が経過し、戦争の悲劇を知ることで、平和のために一步一步進んでいかなくてはなりません。岡さんは、当時の広島の様子を語ることは「生き残った者の使命」だと言っていました。岡さんの心の声を聞いた私たちに何が出来るのか、何をすべきなのかを考え続けることが、ピースメッセンジャーに参加した私たちの使命だと実感しています。

NO MORE HIROSHIMA, NO MORE NAGASAKI

この言葉の意味を知った今、未来の平和を私たちが築いていくために努力し続けます。



平成28年度「青梅・羽村ピースメッセンジャー」報告会



～ワークショップ～

平成28年8月14日（日）14：00～16：30

羽村市生涯学習センターゆとろぎ （参加者54人）



報告会での発表に引き続き、「私たちにとっての平和」を考え、これからの未来に向かって自分たちが出来ることを言葉にするためのワークショップを開催し、青梅市と羽村市の市民など計54人が集まりました。

広島ワークショップでもお世話になったファシリテーターの浦山さんの進行のもと、参加者は7つのグループに分かれ、自己紹介や報告会の発表の感想を話しあいました。

その後、「平和であるとはどのようなイメージか」についてグループ内で対話し、他の参加者の意見や気になったことを大きなクラフトペーパーに書き込んでいきました。

席替えをしながら参加者同士で様々な意見交換をすることで、さらに対話を深めていきました。



最後に、参加者一人ひとりが、「平和な未来をつくるために私がしていきたいこと」を宣言しました。そして、空を飛ばたく鳩の形をした紙に平和への願いを込めてボードに貼りあわせました。





参加者からは、次のような宣言がありました。

- 戦争があった事実、戦争の悲惨さを忘れません。
- 自分の意見だけでなく、他の人の意見も尊重します。
- 他人の気持ちを考え行動します。
- 人にゆずる心を持った笑顔でいる人になりたいです。
- 欲張らず、亡くなった方々の分まで勉強し努力し続けます。
- 人との関わりを大切にします。
- 身近に困ったり悩んだりしている人がいたら、率先して助け、協力します。
- 日々、健康で生活できていることに感謝して、今回広島で学んだことを友達など身近な人に伝えていきます。





3 平和を願う作文



「平和な世界のためにできること」 青梅市立第一中学校 2年 篠崎 彩花

私は広島に実際に行って、被爆者の方々とお話や意見を交換することで資料や教科書では知ることのできない原爆の恐ろしさや当時の広島について知ることができて良かったです。

私がこの体験のなかで一番印象に残ったことは、私たちのグループでお話をしてくださった田淵さんのお話です。

田淵さんは原爆投下前、爆心地の近くで建物疎開をしていましたが、急に1年生と場所を変えることになり、爆心地から少し離れたさつまいも畑の草取りをしていたそうです。

そして、原爆投下後、爆心地の近くで作業をしていた1年生は全滅だったとお話ししてくださいました。このお話しの最後に、田淵さんは「ささいなことで人生や運命が変わる。」と言っていました。

また、「自分達の代わりに行って、作業をしてくれた1年生は死んでしまったのに自分が生きていて良いのだろうか。」と話した方もいたそうです。

私はこのお話を聞き、悲しくなりました。もし、作業場所が変更されていなかったのなら1年生は生きていたかもしれません。しかし、2年生は死んでしまったかも知れないと考えると、その「ささいなこと」がとても恐ろしいものだと思いました。

もう一つ印象に残ったことがあります。それは、平和記念式典のときの平和への誓いです。そのなかの「誰が平和な世界にするのでしょうか。」という問いかけです。

私はこの問いかけを聞いたとき、「平和な世界にするために自分に何ができるのか。」と思い、それから考えてみました。それはやっぱり、広島の出来事を伝えて行くことだと私は思いました。

広島に原爆が投下されてから71年経った今、被爆された方々からお話を聞ける機会はだんだん少なくなっていると聞きました。

だからこそ、私は戦争や原爆の恐ろしさを知らない次の世代に伝える義務があるのではないかと思いました。今回、ピースメッセンジャーとして広島へ派遣された私達だからこそできることを、少しでも多く見つけていきたいです。

一人一人が平和な世界のためにできることを、どんなに小さいことでも行なっていけば、平和な世界になるのではないかと思います。その一人一人の行動が原爆で苦しんだ方や亡くなってしまった方、そして広島や長崎のために出来ることなのだと私は思いました。

戦争はなくそうと思っても簡単になくすことはできません。しかし、相手の意見を聞き、互いに尊重することができれば、けんかなどの争いはなくすことができます。

二度と過ちを繰り返さないためにも、相手を思いやり、互いに尊重しあう気持ちが大切だと思いました。

「広島に行って」 青梅市立第一中学校 2年 松井 ゆきな

私は今回広島に行ってみて、今までと考え方がとても変わりました。今まで私は、「なんとなく戦争はしてはいけないと分かっていたが、あまり深く考えられていない」状況でした。でも、今回行ってみたらその考えが甘かったなと感じました。

まず、岡さんの話を聞いた時です。アメリカの飛行機が空を飛んだだけでも警報を出さなければならぬ。そんな緊迫した状態だったと分かりました。今では飛行機が飛んでいても「空襲だ！」なんて絶対思わないけど、今まで爆弾が落とされてこなかった広島でもこんな騒ぎになるくらいだから、他の地域はもっと大騒ぎだったんだろうなと思いました。そして、大きな威力だったことも分かりました。自分が想像していたことより何倍も恐ろしいものだったのです。

国重さんのお話しも印象的でした。近所の一年生のお母さんが自分の子どもを探しに家を訪ねた時、国重さんはウソをつきました。私達と同じくらいの年齢だったのに、そんな苦しい思いをしていたことに、心を打たれました。きっと国重さんは、そのお母さんを傷つketくなくったんだと思います。まだ学校にいると思う。そう言いました。本当は、もう死んでしまっているのではないかという想いが強かったと思います。でも、傷つketくないという想いで必死にウソをつきました。

亡くなったと分かる少し前、国重さんはそのお母さんに「今までウソをついていた。」と謝りに行きました。そのお母さんは、「だいたいわかっていたよ。」と言いました。私だったら、謝りには行かなかったと思います。だから、国重さんの行動を尊敬します。

他の被爆体験者の方々もみな、亡くなってしまった人たちに申し分けないという想いです。私だったらそう思えるのでしょうか。みなさんだったら、どうでしょうか。被爆者の方々は、とても苦勞してきました。その苦勞を心に刻んで、私も頑張りたいたです。

「平和を願う作文」 青梅市立第二中学校 2年 渡部 日和

私は、平和が当たり前ではないと分かっているけど当たり前だと感じます。自分にとっての平和とは何かと聞かれたら、好きなことができることと言うと思います。しかし、広島に行き、原爆の事を知っていくうちに、考えが変わっていきました。

広島では、多くの事を学びました。その一つは小畑さんの体験談です。

小畑さんは当時中学2年生だったそうです。原爆投下の日、小畑さんは上空に飛んでいるB29が遠ざかるのを見ていました。しばらくすると、白い落下傘が落ちてくるのを見ましたが、気にしていなかったそうです。しかし、数歩歩いた瞬間、真っ白い光線が光りました。その後、小畑さんは爆風で飛ばされ、数秒間倒れたままでした。投下された後、小畑さんは救護班を探しながら家に帰ったそうです。その途中では、倒れている人を運んだり、投下される前とはずいぶん変わってしまった学校を見たり。翌日、小畑さんは重態の1年生の家へお見舞いに行きましたが、意識不明の状態では話も出来なかったそうです。2時間ほどいて、「さよなら」とその1年生に声をかけると、「サヨナラ」と答えたそうです。はっきりと。それが最後の言葉だったといいます。

私は小畑さんに何を希望に生きてきたか聞きました。小畑さんは、「生きることが一番。死にたくなかった。」と言っていました。そのことを聞いて、小畑さんは強いと思いました。

私は小畑さんにもう一つ質問をしました。それは、昔、アメリカの事は恨んでいなかったか、という質問です。小畑さんは、「恨んではいなかった。」と言っていました。小畑さんのお父さんは、アメリカの事を良く知っていたため、アメリカにはかなわないと思っていたそうです。それでも、友達や先生の命を奪ったアメリカに対し、そう思うことができるのはすごいと思いました。

小畑さんの話を聞いて、昔、そのようなことが日本で起こり、それを若い人達に受け継いでいるからこそ平和な日本があるのだと思いました。今、私が平和とは何かと聞かれたらこう答えます。「家族や友達と笑い合えること。」

「戦争と平和」 青梅市立第三中学校 2年 中村 元

1945年8月15日以来、日本は71年間一度も戦争をしていません。71年前20代や10代後半だった人達はもう、ほとんど亡くなってしまっています。また、これから5年・6年とたつにつれ、戦争体験者は減少していきます。そんな中で、戦争を深く知り、後の世代に伝えて行かなければならないのは私達自身なのではないでしょうか。

もし、私達のほとんどが、戦争についてあまり知らないまま大人になってしまった場合、戦争を知る人達は減り、またその子供達のほとんどは戦争という言葉すら知らなくなるでしょう。また、教科書にのる内容は簡単になり、戦争に関する書物はほぼなくなってしまうのではないのでしょうか。

そうなれば戦争はいずれくり返され、当時よりも発達した武器や兵器によって8,500万人とも言われる第二次世界大戦の死亡者数を超える、多くの人々が亡くなることになってしまうかもしれません。それをくい止めるためにも、一人一人が過去の戦争を知り、未来へ伝えていかなければならないのです。

また、今でも世界では紛争が続いていて、2001年より始まったアフガニスタン紛争では、アメリカ・カナダ・イギリス・アフガニスタンを含めた軍人がおよそ10万人死亡し、今もなお多くの人々が命を落としています。また、テロの死亡者数は3万5千人を突破し、多くの犠牲者が出ています。

このように、世界で多く起きている戦争や紛争やテロがある事、また、過去に大きな戦争があった事、広島と長崎に原爆が投下された事、戦争を知っている人達が減りつつある事、このような事を理解し、伝えていく事が必要なのではないかと考えます。

「広島に行って」 青梅市立西中学校 2年 清水 千晴

広島に行って、戦争や原爆の悲惨さが少し分かりました。

岡さんの話で、原爆が落ちた時、爆心地から反対側の窓から、ものすごい光と爆風が入って来て、部屋の端まで吹き飛ばされる程の威力だったと知りました。外にいた人は大火傷を負ったり、焼け死んでしまったり、水が欲しいあまりにお堀に落ちてしまったり、建物は潰れて燃え、まるで生き地獄の様で死に際まで「お国の為に」と国に尽くす人がいたと知りました。岡さんのお話にはとても感情がこもっていました。

田淵さんの話では、8月6日、広島二中の1年生は全滅してしまったそうです。田淵さん達2年生も、さつま芋畑に行っていなければ全滅していたかもしれないそうで、本当に恐ろしい事だと思いました。もしも10年後にもう一度被爆した方から話を聞きたいと思っても、もう聞く事はできないかもしれません。とても貴重な体験でした。

平和記念資料館には、沢山の遺品や資料が展示されていました。特に「人影の石」が印象に残っています。階段に人が腰掛けていてそこに原爆が投下され、強烈な熱線で人の影が残った物でした。一発の原爆が石に影をつけてしまう事に驚きました。

平和記念公園では、慰霊碑をまわったり、原爆の子の像に折り鶴を掛けて献花をして来ました。

平和記念式典では、安倍総理大臣や広島市長、6年生の子達の平和についての話は意味が深く、長くても飽きる事無く聞く事ができ、印象に残りました。

今も地球上にはたくさんの核兵器が存在しています。二度とこんな恐ろしいことが起こらないでほしいと心から思いました。

ピースメッセンジャーに参加する事ができて、「新しい友達と平和の大切さを心で感じる旅」を実感できた事は、一生忘れる事のない良い思い出になりました。

「広島派遣を通して」 青梅市立第六中学校 2年 市川 楓馬

私は今回の青梅・羽村ピースメッセンジャーを通して、原爆の悲惨さや、ヒロシマの人々へもたらした惨害、被爆した方々の思いなどが身に染みてわかりました。

私がこのピースメッセンジャーの中で一番強く心に残っているのは、岡さんのお話です。

岡さんは、私が思っていた戦時中の仕事とは違う仕事をしていました。それは軍の情報通信をする仕事です。軍の施設で働いていた岡さんは、戦時中でも、今とあまり変わらないような食事をしていて、軍の施設にはたくさんの食料があったのだなと思いました。そんな岡さんの話の中でも一番印象に残っているのは、原爆投下直前のお話です。岡さんは前日の夜から夜勤をしていて、原爆投下当日の8時に次の人と交代する予定だったそうです。しかし、8時になっても交代する人は来ませんでした。すると敵機が何機か来たので空襲警報を発令しようとしたとたん、原爆が炸裂しました。このとき、いつもなら、敵機が来たらすぐ閉めるはずの窓を閉め忘れていたそうです。すると岡さんは、その窓から入って来た爆風によって部屋の端から端まで吹き飛ばされ、気絶してしまいました。それから意識を取り戻し外へ出ると、辺り一面が平らで建物一つなかったと涙ながらに語ってくれました。

私は、実際に原爆を体験したわけではないので、辺り一面が平らで建物一つない風景など想像できません。しかし、岡さんをはじめ、被爆者の方々や実際に現地での風景を見た方々の心には、決して忘れる事のできない悲惨な風景だったと思います。

広島では慰霊碑や平和記念資料館などを見学しましたが、その中でも原爆ドームがとても印象に残っています。テレビや写真などでは見たことがありましたが、生で見たのは初めてでした。両親が言っていた通り、本当に大都会の高層ビルが立ち並ぶすぐ近くにありました。

しかし、それによって一層、原爆ドームの存在感が目立ちました。原爆投下前の写真と比較してみると、原爆の爆風の破壊力がわかり、心が痛くなりました。

慰霊碑は一つ一つに人々の思いが込められていて、その一つ一つが犠牲者の方々の思いを語りかけてくるようでした。

私にとって、今回のピースメッセンジャーは、一生忘れることのできない貴重な体験になりました。今後、他の人にこのことを積極的に伝え、後世の平和へ繋いでいけたらと思います。

「平和について」 青梅市立第六中学校 2年 吉野 美月

私は今回、学校の代表として、ピースメッセンジャーに参加しました。

私はあまり深く広島原爆のことを知らなかったのですが、この機会に知ろうと思いました。いざ広島原爆の勉強をして、私たちは体験をしたことがないけれど、大きな恐怖がおそってきました。

8月6日午前8時15分、平和だった広島や家族は、一瞬にしてなくなりました。広島町の並みはほとんどの建物が壊され、外にいたすべての人は一瞬で消えてしまったりけがなどをしている、皮ふなどはとけて、「水、水」と言って池や川に飛び込んでしまった人もいたとのこと。この話を聞いた私は、ことばが出なくなりました。あまりにも衝撃すぎてとてもびっくりしました。

8月4日から8月6日まで、広島に行って平和記念資料館を見て、資料館の中にはいろいろな資料があって、とてもいい経験になったと思いました。あと平和記念公園の中を見て、今はきれいになって建物とかができていたけど、71年前の原爆が落ちたときは、どれだけこの町が悲惨だったのかがとても伝わってきました。

最終日には、平和記念式典にも参加させてもらって、広島に行ったこの3日間は、私にとってもみんなにとっても濃い時間を過ごせたかなと思いました。

今後、私たちが教わった色々なことを、広島原爆を知らない人達に教えていき、もう二度とこのようなことを起こさないようにしていきたいと思いました。このことを後世に伝えていきたいと思いました。

「使命」 青梅市立第七中学校 2年 鈴木 結心

我々は、平和の象徴である広島を訪問し、ただの旅では学べない貴重な体験をしてきました。我々には、この経験を世界へ伝える義務があります。それを伝えるには、自ら動くしかありません。私はそれを実行するここに宣言します。

我々は、広島で平和を脅かす物の一つである原爆について学びました。今、日本人は原爆や戦争を甘く見えています。その証拠は広島にもありました。平和記念公園の雰囲気、慰霊というより観光という空気が強かったのです。我々ピースメッセンジャーは、被爆者の方々から聞いたお話を、被爆者の方々の代わりとなり、後世に原爆の恐しさや平和の尊さを伝えていくのが使命です。それは、原爆や戦争を甘くみている、いわゆる平和ボケの打開も我々の使命ということです。

この先の未来は、平和な世界になっているかはわかりません。ただし、今言える事は、ただ世界平和を唱えても、七夕に「世界が平和になりますように。」と願っても、ただそれだけでは絶対ならないという事です。

個人だけで行動しても、できる事はたかが知れてるかもしれませんが、我々ピースメッセンジャーは、平和や、原爆や、戦争を伝えていかなければならないのです。

「我々も」 青梅市立霞台中学校 2年 旭 りりか

最初は日本が強かった。だが、だんだん負け戦となっていった。それでも日本は国民に嘘をつき、多くの人が負けることはない、そう信じていた。被爆体験者の方は、アメリカを、日本をどう思っていたのだろうか。

私は2人の被爆者の方から話を聞いた。まずは、岡ヨシエさんの話について。岡さんは原爆が落とされた後、アメリカの低空飛行してくる飛行機を見た。その飛行機には、身を乗り出して日本の悲惨な光景を撮るアメリカ人の姿があったそうです。

「ほんつとにこれ程アメリカを憎いと思ったことはない。」

そう岡さんは言っていた。

次は山本さんの話。山本さんは、アメリカのオバマ大統領についてこう言っていた。

「よく勉強した人だなと思った。この人の理念はすごい。大変感動した。頭が下がったよ。」

そして当時の日本にはこう言っていた。

「元々日本が悪い。目の前で子供が死んでいる。そういう状態を起こしておきながら、何故やめなかったのか。むしろ憎んでいたのは日本。」

自分の国を憎んでいたなんてとても驚いた。

今回被爆体験者の方の話を聞いて、心に残った言葉が二つ。

「こちらも反省しましょう。我々も戦争を起こした。」

「憎しみからはもう何も生まれない。」

アメリカも日本も大切にして一緒に協力しようとしているように聞こえる言葉。終戦から何十年たっても、その傷が治ることはないけれど、平和を作っていくことは出来る。そういった希望の兆しが私の心を射抜いた。

「世界には、1万5千の核兵器が存在する」 青梅市立吹上中学校 3年 駒木野 照太

昭和20年8月15日、日本は戦争を終結した。この戦争で、日本では300万人もの人が亡くなった。また、この戦争では世界で初めて原子爆弾が使われ、その年の暮れまでに21万人の人が亡くなった。多くの犠牲者を出し、多大な損害を出した戦争は、多くの人が残酷で悲惨だと考えている。しかし、世界ではいまだ紛争が起こり、核兵器も多くの国が所有している。なぜ、悲惨な戦争は現在もくり返されるのだろうか。また、くり返さないためにはどうしたらよいのだろうか。

私は、自分で意思を持って行動する事と、友人や家族、周りの人々に原爆の悲惨さを伝える事が必要だと考える。被爆者の新出さん、岡さんは原爆の投下直後の事をこう語ってくれた。「皮膚が足まで垂れ下がり、顔は腫れ、誰か分からない人達がこちらに向かって歩いてきた。」「街で火の手が上がり、火が四方にわたって、もう命はないと思った。」これらの事を聞いた後私は、自分が想像してたよりも悲惨で残酷だと感じた。また、知っていたつもりだった自分が恥かしいと思った。そして、岡さんの思いを皆に伝えようと決心した。だから、皆にも悲惨な過去から目を背けないで、原爆のことを知って欲しい。知った後、必ず周りの人に、そして後世に伝えたいと皆は思うはずだ。そう思ったら、必ず行動して欲しい。それは、大変な事だけど何気ないきっかけから話し始め、友達に伝えていけば必ず平和な世界への第一歩につながるから。

また、自分の意思を持って行動することも必要だ。岡さんは、原爆が投下される前、軍事施設で一生懸命「お国の為に」働いていた。そして、文句も言わず毎日真面目に軍の戦力として行動していた。でも、今の私がもしその場にいたら、戦争に反対し真面目に働いてはいないと思う。では、なぜ岡さんは戦争に参加し、軍の戦力になれたのだろうか。それは、岡さんは生まれた時から戦争が身近にあり、お国の為に働く事に対して「当たり前」と考えていたからだとは私は考える。当時は、岡さん以外の子供達も皆、動員学徒として軍の戦力になっていた。また、原爆が投下された後、岡さんは今にも亡くなりそうな少女が「私、お国の為に死ぬの」と言ったのを聞いたそうだ。当時の子供達は皆、今の子供が学校へ行くのと同じように働いていた。それは、軍が「命」を大切にせず「お国の為」に働くことを訴え、それを先生は真に受け子供に教育していたからなせたのだと思う。もし、その当時の人全員が日本の状況を正確に知り、正しい判断をして、自分の意志で行動していれば命の大切さに気付けたはずだ。だからこそ、あの過去をくり返さない為に、自分の意思で行動しなければならない。

最後に、私は今回の研修を通して、被爆者と亡くなった人の思いをしっかりと受けとった。また、ノーモアヒロシマ・ノーモアナガサキの意味をしっかりと読み取れたと感じている。だから、自分から平和を願って一歩踏み出し、学校などで発表した。皆も、周りの人や後世に、原爆の悲惨さを伝える事と自分の意思で行動する事の2つをぜひ実践しよう。それは、勇気のいる事だけど、まずは自分から行動し、皆で平和な世界の土台を築き上げていこう。

「平和を守るために」 青梅市立新町中学校 3年 大石 なつき

みなさん、平和とは何でしょうか。どういうことを平和だと言えるのでしょうか。広島に原爆が投下された当時、旧広島二中生だった新出さんは私たちの質問にこう答えてくださいました。

「平和とは何でしょうか。難しい質問ですね。正直私にもよく分かりません。こうやってみなさんと話していることが平和なことかもしれませんね。」

私は平和とはあたり前の生活なのかもしれないと思いました。でも、今のこの平和がいつ終わってしまうか、またいつ日本で戦争が起こってしまうか分かりません。では、今私たちに平和を守るために、二度と戦争が起こらないために出来ることはなんでしょう。

私は当時、比治山高等女学校の生徒だった岡さんの話の中の、お母さんの腕の中で

「私、お国のために死ぬの。だから、泣かないで。」

と言って命を落とした少女の話が心に残りました。小さい子供からお年寄りまでお国のためにと信念をもって戦争に参加していました。岡さんが、

「戦争が終わって良かったね。」

と言うと、

「バカ！」

と言って岡さんの太ももを打いた同級生。みんなお国のためにと家族よりも、自分の命よりも国の事を優先し、一生懸命まじめにがんばってきました。人々がお国のためにとがんばっていた中、国の考えに逆らって「非国民」といわれた人たちがいます。「非国民」という言葉だけを聞くとその人たちは悪い人のように聞こえます。でも、よく考えてみてください。「非国民」といわれた人の中にも「命の大切さ」を考えて、国の考えに逆らっていた人もいたはずではないでしょうか。

この戦争では真面目な人が国のトップの人々に流されて自分の意思を持たなかったために、戦争に協力して命を失った人が多くいたのではないのでしょうか。だからこそ、私たちは自分の意思をしっかりと持って、人に流されないようにすることが大切だと思います。また、当時の国民たちは、その時の戦争の状況を正しく知ることができず、戦争に協力しても良いのか、してはいけないのかの判断がつけにくかったんだと思います。なので、正しい情報をたくさん知ることとても大切だと思います。身近な例でいうと、テレビのニュース番組を見たり、新聞を読んだりすることです。

平和が続くように、今から私たちにできることは、この他にもたくさんあるはずですよ。みなさんも平和とは何か考えてみてください。そして、その上で平和を守るためにできることは何か、自分なりの答えを出したら、それを自分のものだけに止めるのではなく、自分の意見を他の人に伝えてください。そうすればきっと自分たちが今、平和を守るために出来ることが見えてくるのではないのでしょうか。

「平和を願って」 青梅市立泉中学校 3年 片野 紘輔

当時の人は、「小さい頃から戦争があったため、戦争があることは当たり前のような生活だった。」と話してくださいました。しかし、当時の人は戦争をやりたくてやっていたわけではありませんでした。当時の日本は何事も「国」のためだったので、正しいと信じていた国の判断に従い、国に貢献しようとしていただけでした。その時の状況から、戦争の善悪の判断をすることはとても難しい環境だったことが感じられました。そのような状況を受けて、自分の意思をしっかり持ち、人に流されないことが、今の僕たちにできることではないかと思います。

僕は広島に行き、テレビや授業では感じる事ができない程の悲惨さを感じました。原爆資料館では、原爆投下後のヒロシマの状況を物語る、被爆してボロボロになった制服や、放射能を含んだ黒い雨。旧制広島二中23期生の方のお話では、当時を思い出して涙を流しそうになりながら、原爆投下後のヒロシマを話してくださいました新出さん。当時の苦しみや悲惨さを感じることができました。その中でも僕が一番印象に残っているのは岡さんの話です。岡さんは、原爆投下前の生活から投下後の生活まで全部話してくださいました。岡さんは原爆投下直後、防空壕から外へ出ると辺りは焼け野原になっていて、周りには、皮膚がドロドロになった人、顔が膨れあがって誰か分からない人、お母さんに会いたくても会えない子ども達、というとても悲惨な状況を見て衝撃を受けたと話してくださいました。それが最も悲惨さを感じた話でした。平和を守り続けたいと思いました。そのために「知る・深める・伝える」この3つを実際に行動していくべきだと考えました。「多くの事を知り、その考えを深め、多くの人に伝えていく」これが平和へつながっていくのだと思います。2016年は、終戦から71年にあたります。そのため、戦争体験者が減少していき、若い世代が戦争を体験した人から直接話を聞き、戦争の悲惨さや平和の大切さを感じる機会が少なくなっています。だからこそ、この「知る・深める・伝える」といった3つの行動が今最も重要視されるのではないかと思います。

今突然に、「あなたの考える平和とは何ですか。」と聞かれたら、みなさんは何と答えますか。少し難しいと思います。僕の考える平和は「笑顔があること」「笑顔でいられること」です。世界にたくさんの笑顔があふれるようになったら、「平和になった」と言えると思います。

「平和を願う作文」 桜華女学院中学校 1年 加藤 優実

平和とはなんだろう？みなさんは考えたことありますか？日々の中で平和についてそんなに考えたことはないでしょう。私は、広島へ行き、考える機会や知る機会をたくさん得ました。「平和であってほしい」と思っている、具体的に「平和」とは何かと聞いたらだまり込む人が多いと思います。私は、「平和を願う作文」として、平和についてあらためて考えました。

私の考える平和とは、みんなが元気に学校へ行ったり、夜静かで虫の声だけが聞こえたり、なにより戦争がないのが平和だと思います。人によって「平和」の意味がちがうと思います。このように、いろいろな人がいることでいろいろな意見が聞けたり、いろんな人と話しているような情報を得たりするのも「平和」だと思います。

では、昔の平和は何だったのでしょ。私はお米を毎日食べられたり、病気にかからなかったり、家族で話したりすることが昔の「平和」だったのかなと思います。

昔の人と比べたら、私はどれだけ食べているのかな？どれだけ恵まれているのかな？と思うと、私のごはんを昔の人にあげたくくなりました。

私は今回、広島へ行って、人生の中でもものすごい力と経験になることを沢山学びました。ただ広島へ行って平和資料館とかに行っただけではなく、ピースメッセンジャーでしか学べないことがたくさんありました。被爆者の意見をいっぱい聞けたおかげで、資料館では絶対学べないことを学びました。被爆者の声を直接聞くことで、被爆者の気持ちはどうだったのかとか、どのような形で原爆が落ちてきたのか、そして、原爆が落ちた時の状況やその後のことなど、家族や友人と行ったのではできない体験をピースメッセンジャーでしました。

このような貴重な体験をさせてくれた青梅市・羽村市、また、広島で協力してくださったみなさん、本当にありがとうございました。

来年もまた行けたら広島に行きたいです。

「平和を願う」 羽村市立羽村第一中学校 2年 岡田 莉奈

私は、今年の夏休みにピースメッセンジャーとして、戦争の事を知らない私達世代に戦争の悲惨さを伝えるため、過去に起こった現実を見に広島に行って来ました。

私は、戦争の映画や写真を見たことはありませんでした。見たことがあるのは、ジブリの「ほたるの墓」です。戦争の話なので、戦争がどのような事なのかはなんとなくわかりました。しかし、マンガなのでそこまで現実的には受けとめていませんでした。

初めて見た「広島平和記念資料館」に強い衝撃を受けました。これが現実によって多くの人の命を奪った戦争なんだと知り、そして今もまだ原爆の後遺症に悩まされている人がいると聞きました。戦争が終わって71年もたっているのに。戦争は絶対に二度と起こしてはならないと思いました。

「平和祈念式典」にも出席しました。多くの人が出席していて、多くの人が平和を願いました。

こうして考えると、私達の生きている世の中は平和だと思います。これからもずっと平和であるにはどのようにすれば良いのか。お互いの事をよく考え、話し合いで解決していくことで平和でいられるのではないかと思います。

戦争によって生活、笑顔、命までもがうばわれてしまいます。戦争をしても何もいい事はありません。戦争の辛い過去を多くの人を知り、その現実を見ることによって、今私達がどれだけ幸せなのか、この世の中をどれだけ大切に生きていかなければならないのか思い知らされました。

多くの人がこの現実を受けとめ、伝えていくことも大切です。これからもこの世の中が平和であり続けてほしいと思います。

「広島から学んだ平和」 羽村市立羽村第一中学校 2年 小松 夏巳

今回広島へ行き、授業などだけでは知ることのできない様なことまでを知ることができました。それによって、今まで持っていた「平和」という考えが変わりました。これまでは、戦争が無いことが平和、という単純なもので済ませてしまっていました。しかし、資料を見たり、体験談を聞いていくうちに、戦争がないだけでなくあたり前に生活できることが平和であり、一言では表せないくらい深いものだと思うようになりました。

原爆が落とされたことは知っていましたが、どれだけひどい状況になっていたかを良く知らずにいました。だから資料館にあった「破壊された広島市街地の模型」を見て、一つの爆弾でも一つの街をふき飛ばす力を持っているのか、と驚きました。人間は本当におそろしい物を作ってしまったと思います。さらに、今だにその爆弾が一万五千発以上も世界にあるということに恐怖を覚えました。私は、これが全て無くなることを願っています。原爆の悲惨さや怖さなどが良く分かるのは唯一原爆を投下された日本だけなのです。

日本だけでなく、紛争の起きている国々を含めた世界が、平和になるにはどうしたらいいのでしょうか。世界には色々な人達がありますし、考え方が全員同じことなどありません。その中で誰もが平和になることはとても難しいことで、長い長い年月がかかると思います。だから、私たちが発表したことが、たとえ小さくても、誰もが平和に暮らせる世界への一歩になっているのならとても嬉しいです。

私が今「平和」と感じることは、こうして広島へ行くことができたり、何にも邪魔されずに寝ることができたりする日常から感じます。世界でテロが起きている今、いつ日本でテロが起こるか分かりません。日本は平和ボケしていると言われます。平和なことはとても良いことですが、テロなどに対する警戒の気持ちを持っていることも大切だと思います。

戦争は二度と起こしてはいけません。

唯一の被爆国だからこそ声を大にして言えることです。もう原爆なんて戦争なんていません。

NO MORE HIROSHIMA NO MORE NAGASAKI

「広島ピースメッセンジャー」 羽村市立羽村第一中学校 2年 澤井 真白

8月4日、5日、6日にピースメッセンジャーとして、広島県へ行った。初日には被爆者の岡ヨシエさんの話を聞くという、とても貴重な体験をした。岡ヨシエさんの話には、始まって数秒もしないうちに引き込まれた。原爆当時の情景が思い浮かぶほどだった。

2日目には、平和公園内を見学することができた。そして、ワークショップも行った。そこでは、広島と同世代の人と一緒に、被爆者の方の話を聞き、そして質問したりした。話を聞いていると、原爆当時、たくさんの人の体がやけどでズルズルになっていた。市内は炎ばかりだったなどと話してくれた。でも、私自身が被爆者の方の話を聞いていて、気になったことがあった。それは、家に帰ったということ。やけどで体がズルズルな中、なぜ、すぐに家に帰ろうと思ったのか。質問してみると、被爆者の方は、とにかく、「家に帰ろう」という気持ちでいっぱいだったと答えてくれた。

「帰っている途中で、自分と同じような体の状態の人が数人いた。」と話してくれた。私は、その話を今でも覚えている。

3日目は、平和記念式典に参列した。平和記念式典では、たくさんの人の話があったが、中でも、私が一番印象に残っていることは、子ども代表の平和への誓いだ。

「私たちは、待っているだけではいけないのです。」という言葉に対して、私は、「自分たちの手で、言葉で平和な世界を創っていくんだ。」と思った。

「平和」というものは自然に来るものではない。平和でいられるのは当たり前。そう思うのは違う。では、当たり前のことができるのが平和なのであろうか。それも違う。平和というものはとても難しい。平和とは何か。それを考えていくのが私たちの使命ではないのだろうか。今ある平和がこれからも続くように。一人一人が平和だと思える世界を作っていこう。

「平和とは」 羽村市立羽村第一中学校 2年 松島 暖華

今回、ピースメッセンジャーに参加して、何度も平和について考え、平和の大切さを知った。

平和とは何か。辞書によると「やすらかにやわらぐこと、戦争がなくて世が安穏であること」などと書いてあった。でも平和とはそんな簡単にまとめられることではないと思う。ピースメッセンジャーに参加する前は、ただ単に戦争がないことが平和だと思っていた。でも今は、自分の好きなことができることなどが平和だと感じたり、家族や友達と喧嘩できることも平和だからこそかもしれないと感じることもある。報告会後のワークショップで、この世に平和というものは存在しないと知っている人もいた。確かに、一人一人平和について考えること感じることは違うと思う。だから難しいけれど、どの人が考え、感じる平和も大切だと思う。

広島へ行った時、話を聞かせてくださった被爆体験者の岡さんは、戦争について、「むごく、下らない」と言っていた。戦争に勝てば、土地やお金が増える。でも戦争をするためには武器などが必要で、それに沢山のお金を費やしてしまう。結局意味のないことだと思う。さらに、戦争によって沢山の人が亡くなる。土地やお金のために起きた戦争で命を落としてしまった人は、とても残念だと思う。尊い命。それを簡単に奪うようなことはしてはいけない。

「安らかに眠って下さい 過ちは繰返ませぬから」

原爆死没者慰霊碑に刻まれている言葉。そう、戦争は過ち。繰り返してはいけない。

戦後71年経った今、戦争体験者の心にはまだ、深い傷が残っている。そしてこれからもずっと残っていく。人はなぜ生まれてきたのか。戦争をして、傷つけ合うためではない。決して。

「ピースメッセンジャー」 羽村市立羽村第二中学校 3年 小林 よし乃

私が広島へ行って思ったこと、感じたことはたくさんありました。

山本定男さんや岡ヨシエさんのお話では、原爆のつらさや恐ろしさを聞きました。私はこのお話を聞いて、今と昔では全然違うことを知りました。今は子供が働くことはなく、でも昔は子供でも働かされていたというような、知らないこともたくさん知ることができました。

資料館では教科書に載っているものはもちろん、他にもオバマ大統領がいらした時の写真や寄贈された折りづるなども見ることができました。

平和公園内をめぐる活動では、爆風によって小石がはさまった墓石や、レストハウスの地下が当時のまま残っていることにとっても驚きました。

原爆ドームは写真で見るとは違い、迫力がありました。被爆したアオギリは、事前研修で学習したように被爆した部分を包むようにして生えていたので「こうやって今も生きているのだな」と思いました。

広島の研修で、時にはつらい思いや緊張をした場面があったりして、最初はここにいるのが間違いかもと思っていたけど、今ではみんなのおかげで貴重な時間を過ごすことができましたと思います。

ピースメッセンジャーとして、山本さんや岡さんのお話を伝えていけたらいいと思います。

「未来もずっと平和で」 羽村市立羽村第二中学校 3年 肥土 菜佑子

私は、この広島研修に参加させて頂き、見るもの聞くもの全てにおいて、強い衝撃と感銘を受けました。

被爆体験談での岡さんのお話では、戦争が終わった喜びよりも、全国民が全力で戦った戦争に負けたことがとても悔しかったということを知り驚きました。ワークショップでは、当時広島二中の2年生だった浅野さんのお話を聞くことができました。その中で、「大変な状態で亡くなっている人がいるのに自分が生きていて良いのか。申し訳なく思ってしまう。」と、うしろめたさの気持ちを伝えてくださいました。この気持ちがとても強く私の心に残っています。「生きていて、良かった」ではなく、申し訳ないと思ひ込むほどの地獄絵図だったということが伝わってきました。平和記念資料館では、私が予想のつかなかった黒い雨が降った白壁や、事前研修で朗読を聞き、心懸かりであった黒焦げになった弁当など、その時のものがたくさん展示されていました。その中には、思わず目を背けたくくなるようなものもたくさんありました。

平和記念公園内には緑が多く、きれいな眺めでした。ここで悲惨なことがあったとは想像がつかないほどでした。「ここにはもう100年以上草木が生えないだろう」と言われていたところには、立派なアオギリの木が育っています。とてもたくさん、数えきれないほどの折り鶴がある原爆の子の像の前に行くと、折り鶴にこめられた強い思いが感じられて、胸が痛かったです。

このように、多くの人の思い、願いのつまったものを実際に見たり聞いたりし、とても悲しくなったこの思いをたくさんの人に伝えます。聞いたお話の気持ち、伝えていきます。苦しみながら亡くなった人たちの思い、伝えていきます。私は原爆ドームを見たときに言葉が出なくなりました。頭の中に泣き叫ぶ子どもと母親が、なぜか浮かんできました。私が、感じとったものを次へ次へと伝えます。今のこの平和を守り続けます。平和になるようにできることをします。今も苦しんでいる人がいることも決して忘れません。今は私だけが行動することになるかもしれませんが、一人一人が行動し続ければやがて大きな力となり、平和を導けると思うのです。未来に向けて平和とは何か、もう一度よく考えて行動しようと思いました。いつか全ての核兵器がなくなることを日々願います。以前のような悲しい過ちを繰り返すことなく、亡くなった方が安らかに眠れるように、今の平和が未来もずっと続けていられますように。

自分は改めて平和の重みを知ることができました。たくさんの方の思いを背負い、平和な世界に少しでも近づくよう行動すると誓います。

「当たり前から学ぶ未来の平和」 羽村市立羽村第二中学校 3年 船山 美妃

私は今、戦争がなく好きなものが食べられて笑顔でいることが当たり前の平和な世の中で生きています。だから、戦争は遠い昔のことであまり想像が付きませんでした。だから広島でもっと戦争について自分の心で知りたいと思ったのです。

私は広島で様々な体験をした中で最も心に残ったのは岡さんの話しです。自分や家族のために働いている私たちにとって、お国のために働くという精神に驚きました。自分を蔑ろにしてまでお国のために尽くしていたにも関わらず、岡さんは当時のことについて苦しかったとは言っていませんでした。それに比べて私は、昔の人にとって幸せなことでも辛いと思ってしまいます。例えば勉強です。当たり前に教育を受けている私は、今のありがたみを知らずに面倒くさいと思ってしまうことがありました。しかし、被爆者の方はもっと勉強がしたかったと言っていました。だから私は、当たり前は当たり前ではなくて、当たり前こそありがたいものなのだと思います。

昔と今の当たり前は全く違います。やはり決定的な違いは戦争の有無でしょう。戦争により毎日多くの人が亡くなるのが当たり前だった昔。岡さんは、もう一生あんな辛いことを繰り返してはいけなと言っていました。平和記念資料館で広島での多くの被害を見ました。その一つ一つが見るに堪えないものばかりでした。再びそのようなことが当たり前の世界になったら、昔の人々も悲しみます。広島の被害から、戦争を当たり前にはいけないのだと学ばなくてはいけないのです。

昔と今の当たり前の生活に着目してみて、今は本当に幸せなのだと思います。人によって幸せの形は違うし、不幸だという人もいるかもしれません。しかしそれは、今ある幸せにまだ気づいていないだけかもしれません。自分の周りを改めて見つめ直すと、今は本当に恵まれていると感じられます。

当たり前の生活の変化は、平和へと一步一步近づいている証でしょう。しかし、世界ではまだ紛争が続いています。そこではまだ戦争が当たり前なのです。私は、当たり前の変化は簡単なことだとは思いません。それでも今変わったのは、自らの環境を客観的に見つめ直し、戦争はいけないことだと気づき理解したからではないでしょうか。

私は広島に行き様々な経験をし、戦争は繰り返してはいけなと痛感しました。また、広島を心で感じ、今の当たり前のありがたさを感じました。広島で亡くなった方々の無念を心に留め、平和であることが当たり前の世の中にしていきます。当たり前のありがたさを学んだ私は、日々の当たり前の一つ一つを大切にしていきたいと思います。そして、ピースメッセンジャーとしてそれらを伝えていき、戦争で亡くなった方々の分まで精一杯生きていきます。それが私のこれからの“当たり前”の生活への誓いです。

「被爆者の方が願うこと」 羽村市立羽村第二中学校 3年 山本 珠花

私はこの8月4日、5日、6日の3日間で、多くのことを学びました。実際に被爆した広島で学べたことは、とても貴重な事だと思います。

今、戦争を体験した方は年を重ねるごとに、少なくなってきました。少なくなっているということは、戦争での自分の体験を語ってくれる、「語り部」さんが少なくなっているということです。その中で私達ピースメッセンジャーは、当時比治山高等女学校3年生だった岡ヨシエさん、県立広島二中の2年生だった方々にお話を聞くことができました。1945年8月6日のことや、被爆前後のことをお話していただきました。岡さんと広島二中の方たちの共通点は、まだ中学生なのに学校で勉強をすることは無く、建物疎開などの仕事を手伝っていたことです。岡さんは、お話の中で「私は軍国少女だった。お国のために、働いていた」と話していました。「お国のために働けることに誇りを持っていた」ともおっしゃっていました。

私たち「もっちーず」は、広島二中の田淵廣和さんからお話をお聞きしました。田淵さんのお話によると、軍国少年だったとはおっしゃられてはいませんでした。海軍を強く志望していたと笑顔でおっしゃっていました。海軍の軍歌ばかり覚えては、歌っていたそうです。私達の前でその軍歌を歌っていただきました。とても楽しそうでした。しかし私は、当時の中学生は軍国少女、軍国少年で、男の人は軍隊を希望していたということを知り、戦争は、子供達から勉強を奪い、将来の夢を戦争一筋に変えてしまうもの、日常の生活を全て奪っていくものだと思います。

終戦の放送を聴いたとき、田淵さんは涙が出て、「戦争へ行かなくても、良いんだ」と安心したそうです。岡さんも、「戦争が終わって良かった」と思ったと、おっしゃっていました。

そして私たち「もっちーず」は3日目に福田先生のおかげで、当時県立広島第一高等女学校の1年生だった梶山雅子さんにお会いすることができました。梶山さんは県立広島第一高等女学校の慰霊式にご参列していましたが、私達の前で3分の間、お話をしてくださいました。目に涙を浮かべながら梶山さんと最後に握手をしました。梶山さんの手の温かさを忘れることはありません。

今回、私たちに語ってくださった岡さん、田淵さん、梶山さん。みなさんは口をそろえるように、「広島であったこの出来事を忘れてはならない。この出来事を伝えてほしい」とおっしゃっていました。私達ピースメッセンジャーには使命があります。広島で学んだ多くのことを忘れ去られぬよう、伝えていくことです。そして、平和について誰かと一緒に考えていくことが、平和への第一歩だと思います。

「平和とはなにか」 羽村市立羽村第三中学校 1年 高嶋 貫多

ぼくは、広島に行き戦争や平和のことについて学びました。ぼくが思う平和は、心配や争いがなくみんなが平等であることだと思います。

平和にするためには、まず戦争を二度としてはいけないと思います。戦争は罪のない人や大切な人までもが巻きこまれてしまい、たくさんの人が悲しみ、苦しみます。だから戦争は絶対にしてはいけないし、しないためには、お互いがしっかりと話し合い、相手の気持ちを考え、分かり合うことや、身の周りの小さな争いからなくしていけば戦争はなくなると思います。

でも戦争をしないだけが平和ではありません。世界には、食事を満足にできない子供たちや学校に行きたくても行けない子供達がたくさんいます。こうしたことをなくすには、世界中の一人一人が、格差のない平等な暮らしになればよいと思います。

被爆者の人々が年々少なくなり、戦争や平和についてよく知らない人たちが多くなった今、ぼくはこのピースメッセンジャーで学んだことを、後世に伝え、また一歩平和へと近づければいいと思います。

「平和を築くために」 羽村市立羽村第三中学校 2年 橋本 竜成

「戦争は絶対にあってはならない。」

「No more Hiroshima, No more Nagasaki.」

毎年8月ごろになるとよくこんなことを聞きます。しかし今まで私は、「そんなのは当然だし、そう同じことを連呼し続けなくてほしい」と思っていました。それしか言うことは無いのかと思うぐらいに言われ続けるメッセージが大嫌いでした。しかし私は同時にこう思いました。そこまで言うほど悲惨だったという戦争は、一体どんなものだったのかと。私はそれが知りたくなりました。自分自身で戦争の悲惨さを感じてこよう。そう思って、私はピースメッセンジャーとして広島へ行くことを希望しました。

「安らかに眠って下さい 過ちは 繰返ませぬから」

私が広島で知った過ちは、私には大きすぎるものでした。特に、広島平和記念資料館に展示されていた8時15分を示したまま止まってしまった時計や、真っ黒のお弁当箱、がさがさのうろこのようになった火傷が印象的でした。一瞬で命と建物を吹き飛ばす原子爆弾の存在を疑いました。そして同時に、8月ごろに聞くあのメッセージを忌避していたことを反省しました。後悔しました。あの日死んだ人たちは、自分の身に何が起こったのかすら理解できないまま、恐怖と苦痛の中で息途絶えていったのでしょう。そんな人たちのことを考えていなかったことを恥ずかしく感じました。

私はこのピースメッセンジャーの事業を終えたときこう思いました。私と同じように戦争のことをよく分からないままにメッセージを軽くとらえている人も多くいるのではないかと。私はそんな人たちに正しい、戦争の事実を知ってほしいと思います。だから私は戦争の事実を忘れず、平和を訴えていこうと思います。

「核兵器のない世界へ」 羽村市立羽村第三中学校 2年 本國 大和

1945年8月6日8時15分に広島に、8月9日、11時2分に長崎に、世界で初めて原子爆弾が投下されました。熱線、爆風、放射線、これら3つが複雑に作用して大変大きな被害をもたらしました。広島市内、長崎市内は、跡形もなく何もなくなりました。熱で溶けた人、爆風によって瓦礫に押しつぶされた人がたくさんいました。また、放射線をたくさん浴びて後障害になり、白血病や癌で亡くなる人もいました。そして、今もなお後障害を患っている方や、非現実的な事を目の当たりにして心に傷を負っている被爆者の方もいます。

あれから71年間経った今もなお人々を苦しめている原子爆弾は、いったいどうして投下されたのでしょうか。

アメリカは、原爆の威力を正確に測定できるように、投下目標を直径約4.8キロメートル以上の市街地を持つ都市の中から選び、原爆の投下まで町並みを残すため、5月28日に目標都市への空爆を禁止しました。そして、7月25日には目標都市の広島、小倉、新潟、長崎のいずれかに対する投下命令を下しました。8月2日、広島を第一目標とする命令が出されました。それは広島に連合国軍兵士の捕虜収容所がないとっていたためです。原爆は投下目標を目で確認して投下することになっていました。8月6日はよく晴れており、それが可能だったので、原爆が投下されました。

このような事があり、原子爆弾は投下されてしまいました。

広島へ行き、原爆による被害がどのようなものだったのかを知り、改めて戦争や原子爆弾の恐さを感じました。

広島と長崎の人々を苦しめた歴史を知らながら、なぜ現在も核兵器を保有する国があるのでしょうか。原爆で亡くなった人や今も原爆で苦しんでいる人のためにも、私たち日本人が核兵器は絶対にいらないと世界中に向けて訴え続ければ、きっと核兵器はなくなるのではないのでしょうか。

「平和の大切さ」 羽村市立羽村第三中学校 2年 松永 悠

私は今回ピースメッセンジャーとして広島に行き、教科書やテレビでは学べないことを、実際に行き、目で見て、心で感じ、たくさんのことを学びました。今回、被爆者の方々に原爆投下の日のことを聞きました。1日目は、岡ヨシエさんという方に話を聞きました。岡さんは当時中学生でした。戦争中は、中学生でも夜勤があったそうです。広島県民の人たちは、誰一人として、広島に爆弾が落とされるとは思っていなかったそうです。なぜなら、原爆投下の当日まで、広島には爆弾が落とされなかったからだそうです。そして、8月6日、雲一つない真っ青な空だったそうです。8時15分、ピカッというものすごい光といっしょに、爆風で岡さんは飛ばされ意識を失ったそうです。5分程経ち、目を覚まし辺りを見回したとき、岡さんは、言葉を失ったそうです。原爆投下の前の広島では想像できないような、悲惨な状態だったそうです。そのとき、黒い雨が降ってきて、岡さんはぬれたそうです。岡さんは、この黒い雨のことを、火を消してくれた恵みの雨だと思っていたそうです。ですが、この黒い雨は放射能を含んでいて、原爆で大けがをした人は10日すぎまでにほぼ全員が亡くなったそうです。そして、8月15日の天皇の放送により、戦争が終わりました。しかし、原爆症で亡くなる人は、戦争が終わってからもたくさんいて、岡さんは、あまりの辛さに「耳」からも涙が出てきたそうです。

話を聞く以外に、実際に原爆ドームを見たり、目で見て確かめられるものもたくさんありました。私は始め、先生にさそわれて、ちょうど予定もかさなっていないから行くかと軽い気持ちで参加しました。でも実際に行ってみて、すごくいい経験になったなと感じました。

私が今回広島に行って学んだことは、「平和」です。そして、私が考えた平和とは、お金持ちかどうかということではなく、一人一人が楽しく、幸せだと思えることです。すごくいい経験になり、参加できてよかったです。

おわりに

「青梅・羽村ピースメッセンジャー2016中学生広島派遣事業レポート」を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。広島を訪問した中学生が力強く発信したメッセージが、多くの人の心に響くことを願います。

このレポートを読んでいた皆さんも、平和をつなげるピースメッセンジャーの一員です。家族や友人など、身近なところから小さな“平和”をたくさん作っていき、誰もが幸せと感じる平和な世の中を築いていきませんか。

最後になりますが、本事業を実施するに当たり、貴重な被爆体験を中学生にお話いただいた岡さん、浅野さん、国重さん、小畑さん、田淵さん、塚本さん、新出さん、山本さん。また、ワークショップで広島の中学生と一緒に考えていただく機会をいただいた広島女学院中学校の那須先生。そして、青梅市・羽村市の中学生の活動を指導し、サポートしていただいた福田先生、岩崎先生、大学生リーダーの皆さんやワークショップの進行役を務めていただいた浦山さんなど、ご協力いただいた全ての方々に心より感謝申し上げます。

青梅・羽村ピースメッセンジャー2016

中学生広島派遣事業レポート

～ヒロシマを訪問して考えた平和～

発行日 平成29年2月
発行 青梅・羽村子ども体験塾
編集 青梅・羽村子ども体験塾実行委員会
事務局 青梅事務局

青梅市企画部秘書広報課広聴・国際交流担当

〒198-8701 東京都青梅市東青梅 1-11-1

0428-22-1111（代表）

div0110@city.ome.tokyo.jp

羽村事務局

羽村市企画総務部企画政策課企画政策担当

〒205-8601 東京都羽村市緑ヶ丘 5-2-1

042-555-1111（代表）

s101000@city.hamura.tokyo.jp



သေချာစွာ
အောင်မြင်
စေရန်
အားပေးပါ